

駒ヶ原南

長野県上伊那郡宮田村駒ヶ原南

— 遺跡発掘調査報告書 —

1977

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会

駒ヶ原南

長野県上伊那郡宮田村

駒ヶ原南遺跡発掘調査報告書

1977

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会

序

駒ヶ原南遺跡は、宮田村と駒ヶ根市の境を流れる太田切川と、村の中央を流れる小田切川の間にひろがる駒ヶ原台地の東南端に位置する。今回の発掘は、昭和52年度県営ホ場整備事業の施行地区に当たったので、記録保存による発掘を実施した。調査の結果、縄文前期の住居址7軒、ロームマウンド2基、弥生時代後期の住居址3軒、弥生時代後期の方形周溝墓2基、溝状遺構1箇所を調査した。特に縄文前期前半の住居址は、中越遺跡と関係をもつものとして重要視されるにいたった。また、方形周溝墓の発見は、上伊那では辰野町樋口五段田遺跡で2基、箕輪町堂地遺跡で1基、伊那市西春近小出で1基、駒ヶ原南遺跡出土を合せて6基を数える貴重な資料を得られたことは、弥生時代後期の墓制の研究上大変貴重な存在と言わなくてはならない。今回の発掘にあたり、長野県教育委員会並びに南信土地改良事務所の各位と、団長友野良一氏をはじめ、赤羽義洋・丸山弥生両調査員の御努力と、多くの方々の御協力に対し心から感謝を申し上げる次第である。

昭和53年3月

宮田村教育長 林 金 茂

例　　言

1. 本報告書は、南信土地改良事務所の計画した宮田村圃場整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査として行なわれた、長野県上伊那郡宮田村駒ヶ原南遺跡の発掘報告書である。
2. 調査は南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、発掘調査は昭和52年5月19日より7月2日まで残務整理を含め実施された。
3. 本報告書は契約期間内にまとめる事が要求されており、且つ調査員はそれぞれの勤務についているため、調査結果の綿密なる検討や研究の時間が十分にとれなかつたので、検出された遺構、遺物をできるだけ図化することにした。
4. 資料作成では、遺構と遺物の実測図は丸山弥生・赤羽義洋両氏が担当した。
5. 写真撮影は、遺構写真を友野良一・小木曾清・赤羽義洋・丸山弥生が担当し、遺物写真は友野良一が担当した。
6. 本文執筆は友野良一・赤羽義洋が担当した。（執筆者名は、担当した項目の末尾に明記）
7. 遺構実測図は原則的には住居址、1号周溝墓、ローム・マウンドは $\frac{1}{60}$ 、第2周溝墓は $\frac{1}{80}$ 、土器は復原可能のものはなかった。土器拓本は $\frac{1}{3}$ 、石斧 $\frac{1}{3}$ 、石鎌 $\frac{2}{3}$ 、紡錘車 $\frac{2}{3}$ 。
8. 遺物分布図は、発掘区全体のものは $\frac{1}{100}$ 、各遺構のものは各々の遺構実測図の縮尺に合わせてある。
9. 遺物分布図中の記号の種別は図各に示してある。また、図中の番号は台帳番号と同一のものを使用したが、出土した遺物すべてについてナンバーリングすることはできなかつたため、図及び図版に掲載したものに限つた。
10. 遺物番号は、図・図版とも台帳番号と同一のものを使用し、文中でも同様である。
11. 遺構（住居址ならば竪穴部分に限る）等の出土遺物については、図・図版に掲載したものに限つて一覧表を作成してある。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	(1 ~ 3)
第1節 調査に至るまで	(1)
第2節 調査の組織	(1)
第3節 調査の経過	(2 ~ 3)
第Ⅱ章 遺跡の概観	(3 ~ 7)
第1節 遺跡の立地	(3 ~ 4)
第2節 周辺の遺跡	(5 ~ 7)
第Ⅲ章 調査の結果	(8 ~ 43)
第1節 遺跡の概要	(8)
第2節 縄文時代の遺構と遺物	(9 ~ 20)
第3節 弥生時代の遺構と遺物	(21 ~ 28)
第4節 方形周溝墓	(29 ~ 33)
第5節 その他の遺構と遺物	(33 ~ 43)
所見	(44)

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 図1 駒ヶ原南遺跡の位置 | 図33 各期の石器・鉄製品 |
| 〃2 駒ヶ原南遺跡の層序 | 〃34 製作途中の磨製石鏃 |
| 〃3 縄文早期末～前期の遺跡分布 | 〃35 第2号・第3号住居址出土土器 |
| 〃4 弥生時代の遺跡分布 | 〃36 周溝墓その他出土の弥生土器ほか |
| 〃5 グリッドの設定 | 〃37 各期の石器(1) |
| 〃6 第4号住居址 | 〃38 各期の石器(2) |
| 〃7 第4号住居址の遺物分布 | 〃39 駒ヶ原南遺跡遺構配置図 |
| 〃8 第5号住居址 | 〃40 駒ヶ原遺跡の遺物分布 |
| 〃9 第5号住居址の遺物分布 | |
| 〃10 第6号住居址 | 図版1 遺跡の立地・発掘区の近景 |
| 〃11 第6号住居址の遺物分布 | 〃2 第4号住居址、第5号住居址 |
| 〃12 第7号住居址 | 〃3 第6号住居址、第7号住居址 |
| 〃13 第7号住居址の遺物分布 | 〃4 第8号住居址、第9号住居址 |
| 〃14 第8号住居址 | 〃5 第10号住居址、第1号・第2号マウンド |
| 〃15 第8号住居址の遺物分布 | 〃6 第1号住居址 |
| 〃16 第9号住居址 | 〃7 第2号住居址 |
| 〃17 第10号住居址 | 〃8 第3号住居址 |
| 〃18 第1号・第2号ローム・マウンド | 〃9 第1号・第2号方形周溝墓 |
| 〃19 第1号・第2号ローム・マウンドの遺物分布 | 〃10 第1号方形周溝墓 |
| 〃20 第1号住居址 | 〃11 第2号方形周溝墓 |
| 〃21 第1号住居址の遺物分布 | 〃12 縄文時代前期の土器 |
| 〃22 第2号住居址 | 〃13 縄文時代前期の土器ほか |
| 〃23 第2号住居址の遺物分布 | 〃14 石鏃、スクレーパー、礫器 |
| 〃24 第3号住居址 | 〃15 磨石、石皿、打製石斧 |
| 〃25 第3号住居址の遺物分布 | 〃16 打製石斧、フレイク |
| 〃26 第1号方形周溝墓 | 〃17 フレイク、弥生時代の各種の石器 |
| 〃27 第1号方形周溝墓の遺物分布 | 〃18 炭化物の付着した弥生土器 |
| 〃28 第2号方形周溝墓 | 〃19 各種の弥生土器 |
| 〃29 第2号方形周溝墓の遺物分布 | 〃20 フィナーレ |
| 〃30 第1号溝状遺構 | |
| 〃31 第1号溝状遺構の遺物分布 | |
| 〃32 縄文時代前期の土器 | |

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至るまで

宮田村のほ場整備事業は全村を対象に構想が練られ、昭和44年大久保地区の53ヘクタールが団体営として施工され、昭和45年の総合開発計画によって、その全容が決定された。宮田村には約49の遺跡群が全地域に分布しておりどの地区にも埋蔵された文化財が多数点在しております、しかも一区画30アール平均に造成されるため大部分の遺構その他に壊滅的な打撃を与えることは必至であります。県営ほ場整備事業と言う大仕事の中に遺跡調査と言う重大な仕事が増え、が然文化財熱が高まりました。昭和47年の古町、田中北両遺跡を瑞切りに昭和48年の広垣外、木戸口両遺跡、昭和49年の広垣外遺跡、昭和50年姫宮、向山両遺跡、さらに昭和51年松戸、五升蒔、駒漬水、下の段の4遺跡と発掘調査が行なわれ、その面積2,750m²、事業費1,330万円がかけられ、大きな成果が認められました。ほ場整備事業もようやく見通しが出てまいりました。残されたいいくつかの遺跡も充分な調査を期待いたします。この調査が行なわれたのは、教育委員、文化財保護審議委員はもとより県文化係の御指導と、事業主体であります南信土地改良事務所、それと土地所有者の絶大なる御理解と御協力のたまものと感謝いたしております。（太田照夫）

第2節 調査の組織

駒ヶ原南遺跡調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
調査員	赤羽 義洋	長野県考古学会員
〃	丸山 弥生	上伊那考古学会員
〃	小木曾 清	宮田村考古友の会会長
〃	小林 喜美江	信州大学生
〃	伊藤 修	上伊那考古学会員
調査事務局	林 金茂	宮田村教育長
〃	太田 照夫	宮田村教育次長
〃	古河原 正治	宮田村教育委員会
〃	竹松 正恵	〃
〃	伊藤 順男	〃

第3節 調査の経過

月 日	日 誌
5. 18	午前中役場の小形トラックで発掘用具の運搬。午後は現場の整備。遺物の表採。
19	発掘地域を A・B、C・D、E・F 地区に区分。耕土20cmをブルドーザで除土。
20	発掘器材の点検、テント張り。B、E・F 地区の地層調査。B 地区に土塙発見。
21	調査地区にグリッド設定。南北にA～T、東北に1～33まで抗打。
23	グリッド調査、Q の31附近に小穴 6 箇を検出。R の30に弥生式土器片を発見。 標準の地層は、I 層黒土層、II 層耕土層、III 層地場、IV 層黒褐色層、V ローム。
24	C 地区O の29～31グリッドのIII層下に床面と柱穴を発見、第1号住とする。
25	午後よりM-28～32、L-28～32グリッドの調査
26	K-30～32グリッド、L-30～32、M-30～32、 る。本日は全員で第1号住居址の調査を行なう。
27	第1号住居址の調査。本住居址は床面まで水田造 成時に破壊されたことが確認 される。柱穴と周溝が検出された。
28	F・G-31に第2号住居址を発見。弥生式後期の土器片が検出。
29	第2号住居址掘り下げ。
30	第3号住居址を発見。
31	A-27、B-27附近の調査。
6. 1	A 区の調査は A～K の 8～10 の各グリッドを調査。K-8 グリッドに溝状遺構 を発見。第1号、第2号住居址の写真撮影、遺構実測。
2	F 地区を新に拡張する。ブルドーザーで西20m耕土を除土する。グリッド設定。 第3号住居址の実測。
3	F 地区各グリッドの調査。遺構らしきものは発見されなかった。第3号住居址の 写真撮影。
4	E 地区の各グリッドの調査。
5	E 地区、D 地区の各グリッドの調査。
6	E 地区、D 地区の調査。
7	C 地区の調査。
9	E 地区北側に方形周溝墓の溝が発見される。
10	方形周溝墓の東側の溝が検出される。中心部に黑色土の落込みを確認。
11	A 地区に 2 号方形周溝墓を発見。第 2 周溝墓の北に縄文前期の第 1 号住発見。
14	弥生後期の土器を検出。第 1 号周溝墓との中間に溝状遺構を 検出。遺構内から縄文前期の土器出土。
15	A 地区の未調査箇所を発掘。

月 日	日 誌
6. 17	ロームマウンド1・2号を発見。
18	住居址の調査。 縄文第1号址未調査箇所の調査。縄文第2号
19	縄文第3号住調査。
20	縄文4・5・6号住を調査。
21	駒ヶ原南遺跡の調査は一応終了する。
22	調査の残務整理。

第Ⅱ章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地

1) 駒ヶ原南遺跡は、長野県上伊那郡宮田村駒ヶ原南地籍にある。国鉄飯田線宮田駅の南東2km、国道153号線より東300mの地点に所在する。遺跡地は、中央アルプス木曽駒ヶ岳に源を発する大田切川と、諏訪湖に源を発する天竜川の合流する段丘上にあり、標高640~644mの台地端に分布している。南は広大な流域面積をもっている大田切川を狭んで駒ヶ根市と境している。東は、天竜川が片麻岩地帯を刻みこんで、伊那峡から大きく西に浸蝕をした、底地にある大久保部落が眼下に展開する。

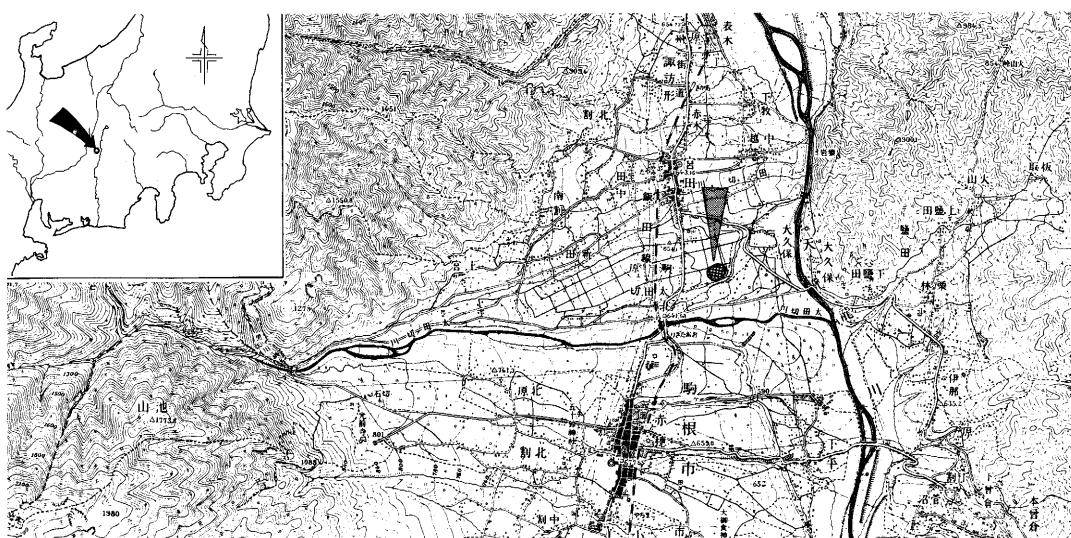


図1. 駒ヶ原南遺跡の位置

2) 地 質

大田切扇状地は、本村側では東西に2.5~4.5%の勾配で傾斜している。遺跡の地帯は北割・南割耕地より勾配がゆるやかで2.5~2.6%の傾斜をなしている。遺跡の東は比高30mの段丘になっていて、本村大久保部落と接している。

木曾山脈は地質構造上では、内帯に属し、主として花崗岩と、古成層の変成された黒雲母粘板岩で代表される弱变成岩、黒雲母片岩、縞状片麻岩からなっている。花崗石は木曾駒ヶ岳の南部に露出し、この中には、ホルンヘルス、黒雲母片麻岩がとり込まれている岩質構造をなしている。本遺跡の所在する宮田村は、木曾山脈の中程に位し、その地質構造は、領家花崗岩である。岩質としては班状花崗閃綠岩、縞状片麻岩、変光綠岩、中粒黒雲母花崗岩、細粒雲母花崗岩等の岩質からなっている。宮田村の平坦地は、これ等の岩石が基盤となって洪積台地が形成されている。この台地の上にローム層が1~5m堆積した地質構造である。

3) 層 序

駒ヶ原台地の東南端に当たる地点には、一見平坦に見えても現地を調査してみると、意外に微地形的な変化が多いのに気付く。調査地点は発掘した個所の一番地水路に接した所を選んで行なわれた。I層は10~15cm耕土層。II層は水田造成の時埋土した黒褐色土層。III層は水田造成前の耕土層(灰黑色土)12~19cm。IV層は黒色土(粘性、炭化物混)層。V層は暗褐色(粘性で軟く炭化物混入)。VII層は13~20cm暗褐色の堆積層(粘性でIIに類似している)。VIII層は9~22cm褐色土と暗褐色の混った層(弱粘性)。IX層は26~30cmのソフトローム層で色調は黄褐色土(軟粘性)。ソフトロームの下層は駒ヶ原台地の基盤をなしている洪積層の上部に当る部分である。(友野)

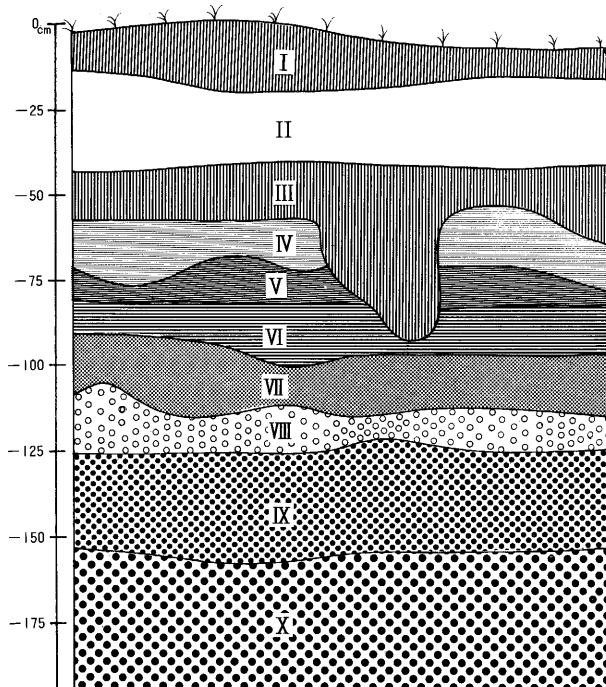


図2. 駒ヶ原南遺跡の層序 (1:40)

第2節 周辺の遺跡と歴史的背景

西の山麓から東の段丘に向って傾斜しながら展開する宮田の村には、先史・原始時代からの遺跡も多い。現在確認されているものでも49遺跡にのぼっている。その中で遺跡の集中するのは、村の中を流れる大小河川の沿岸地帯が大部分を占めている。縄文早期から弥生時代にいたる複合遺跡である向山遺跡は大沢川を右岸段丘上に分布する。本遺跡からは、中越遺跡類似の土器が出土し注目された。大沢川と、小田切川に挟まれた中越遺跡は、縄文前期初頭の大集落址で、今日まで59軒の住居址が確認され、この期における中心的な遺跡である。駒ヶ原南遺跡は、中越遺跡のうちの一時期の移動領域の遺跡の可能性の強い遺跡である。

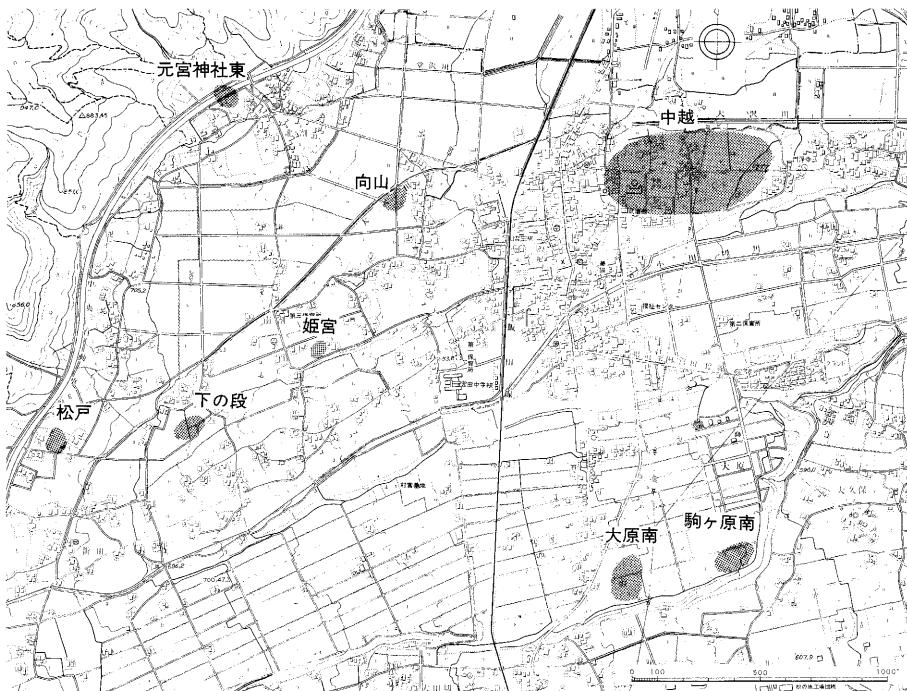


図3. 縄文早期末～前期の遺跡分布

遺跡地名

- | | | |
|------------|--------|----------|
| 1. 元宮神社東遺跡 | 宮田村北割 | 縄文早期末 |
| 2. 向山遺跡 | 宮田村南割 | 縄文早期末・前期 |
| 3. 松戸遺跡 | 宮田村南割 | 縄文早期末 |
| 4. 下の段遺跡 | 宮田村南割 | 縄文早期末 |
| 5. 中越遺跡 | 宮田村中越 | 縄文前期 |
| 6. 駒ヶ原南遺跡 | 宮田村大久保 | 縄文前期 |
| 7. 大原南遺跡 | 宮田村駒ヶ原 | 縄文前期 |

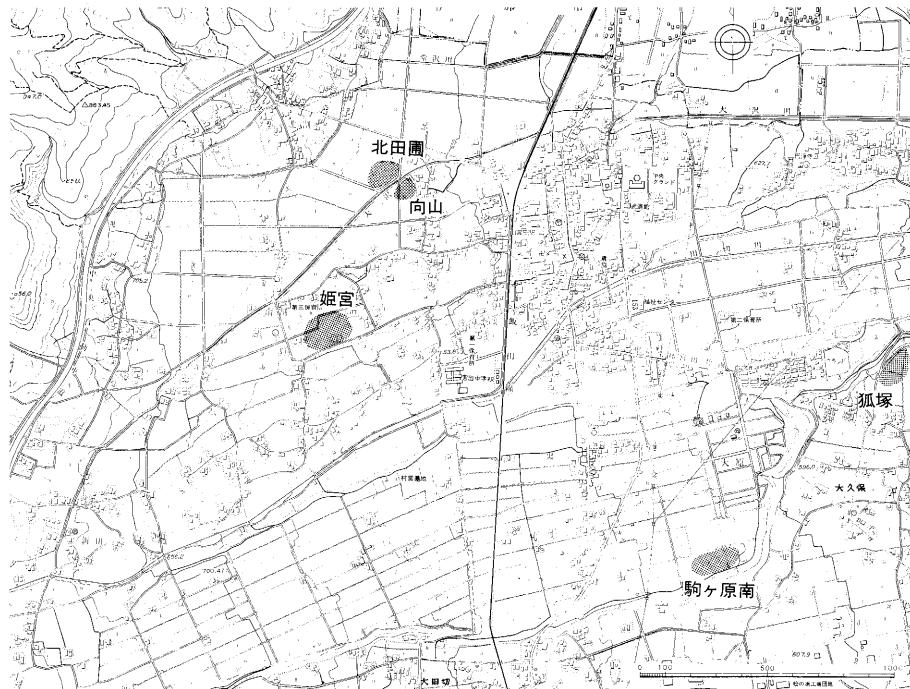


図4. 弥生時代の遺跡分布

遺跡と地名

1. キツネ塚遺跡	大久保	弥生中期
2. 向山遺跡	南割	弥生後期
3. 姫宮遺跡	南割	弥生後期
4. 北田甫遺跡	北割	弥生後期
5. 駒ヶ原南遺跡	大久保	弥生後期

調査された遺跡の概要

- 元宮神社東遺跡は中央道埋蔵文化財調査団によって調査された遺跡である。縄文早期末の住居址が発見され注目された遺跡である。
- 向山遺跡は甫場整備事業によって調査された遺跡である。縄文早期と前期及び弥生後期の遺跡である。
- 下の段遺跡は甫場整備事業によって発掘が行われた遺跡。縄文早期末の遺物が多く出土。
- 松戸遺跡も甫場整備工事のため調査された遺跡。縄文早期末の砂利マウンドより早末の土器出土。
- 中越遺跡、縄文前期前半の住居址59軒が発見された遺跡。
- 狐塚は弥生中期の遺物が発見された遺跡。7. 北田圃遺跡は弥生後期の木柵が発見された遺跡。
- 姫宮遺跡は、弥生後期の住居址29軒が発見された。9. 駒ヶ原南は今回の発掘遺跡（畧）

宮田村で調査の行われた遺跡

1. 中越下遺跡 中越部落の北にあり、県営甫場整備のため昭和45年度調査が行なわれた。土師の土塙、竪穴等が発見された。
2. 中越遺跡②は、昭和31年、32、43、44、51、52年の間8回に亘って調査が行なわれた。住居址は59軒の多きに達し現在では縄文前期前半の集落では最大級の遺跡である。
3. 中越遺跡③、この遺跡は中越遺跡のうちでも南に位置する。昭和52年住宅建設のため調査された遺跡である。縄文後期の環状集石土塙墓として注目を集めた遺跡である。
4. 田中北遺跡 北割田中部落の北に所在する遺跡である。昭和47年県営甫場整備事業に伴ない行なわれた遺跡である。時期不明の竪穴1基、土師、須恵、灰釉を検出した。竪穴1基、鎌倉期の柱穴址1基が発見された遺跡である。
5. 古町遺跡 北割古町地籍に所在する遺跡である。昭和47年県営甫場工事に依り調査が行なわれ、南北朝期の住居址1軒と、平安時代灰釉陶器、鎌倉期の天目茶碗、室町期の鉄釉香炉等が出土。
6. 木戸口遺跡 北割木戸口地籍に所在する遺跡である。昭和48年度県営甫場整備工事に依り発掘された遺跡である。木戸口と言う地名は、「ミタノウチヤ宮田駅」の木戸が置かれたと想定されて調査が行なわれたが駅址に関係する遺構は発見できなかった。
7. 広垣遺跡 地割宮の沢の扇状地南端に位置している遺跡である。昭和48年、49年に亘って調査され、奈良時代、平安時代の住居址5軒、竪穴、ロームマウンド、柱穴址、いずれも平安時代。
8. 天白古墳 昭和45年中央道発掘調査団により、調査が行なわれた。後期の横穴式古墳である。
9. 元宮神社東遺跡天白古墳と同時に調査が行なわれた。縄文早期末の住居址3軒、竪穴等出土。
10. 宮の沢遺跡 昭和45年中央道調査団によって調査。縄文中期後半住居址2、平安時代竪穴2。
11. 円通寺遺跡 昭和45年中央道調査団によって調査。灰釉陶器を伴なう住居址2、柱穴址2。
12. 高河原遺跡 昭和45年中央道調査団によって調査。縄文中期後半の住居址4軒が発見された。
13. 熊野寺 南割松戸地籍に所在する。昭和49年中央道調査団により調査が行なわれた。現在の本堂址4、旧礎石、配石、集石、その外熊野権現社の旧礎石。灰釉を伴なった住居址1軒を発見。
14. 松戸遺跡 南割松戸地籍に所在する遺跡。縄文中期後半の住居址5軒、灰釉を伴なう住居址1軒、中世の柱穴址、ロームマウンドからは縄文早期末の土器が出土。地神様の骨壺は鎌倉時代。
15. 五升蒔遺跡 51年度甫場整備により調査された遺跡。縄文中期後半の住居址2軒、後期土器。
16. 下の段遺跡 五升蒔遺跡と同じ年次。縄文早期末の竪穴、中世の柱穴址、小田切城の堀検出。
17. 姫宮遺跡 昭和50年県甫場事業、弥生式後期の住居址30軒、土塙、マウンド、竪穴等を調査。
18. 田中南遺跡 昭和52年住宅造成により調査が行なわれた遺跡。石芯のカマドの土師の住宅1。
19. 向山遺跡 昭和50年県甫場事業により調査された遺跡。縄文早期表裏縄文の住居址1軒、縄文中期末の住居址2軒、弥生式後期の住居址1軒、その外早期と思われる住居址1軒を発掘。
20. 滝ヶ原遺跡 昭和49年県企業局の住地造成により調査。縄文中期末の住居址6軒を調査。
21. 西垣外遺跡 昭和38年、大久保西垣外で発掘した遺跡である。石組煙道をもつ土師時代の住居址。
22. 三つ塚古墳 駒ヶ原三つ塚 昭和27年大場磐雄博士担当で発掘。古墳時代後期の古墳である。
23. カラス林古墳 昭和51年無届で破壊された古墳である。出土遺物より後期前半と推定される。

(友野)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 遺跡の概要

以上に記した調査の経過によって調査された広さは、東西約80m、南北約95m、7,600m²にわたった。その結果、検出された遺構は、縄文前期住居址6軒、ロームマウンド1基、弥生式後期の住居址3軒、方形周溝墓2基であった。個々の遺構については別項にて述べられているので、ここでは説明を省くことにする。本遺跡の周辺には伊那農業協同組合の畜舎や倉庫が建られているが、おそらく、遺跡はその範囲までは広がるものと推定される。駒ヶ原南遺跡は上記の成果の性格からして、遺跡の一部が明かになったに過ぎないと考えるのが妥当であろう。また、本遺跡の西方300m、国道バイパス寄りの土取現場からも、縄文前期前半の土器が発見された。おそらく、駒ヶ原南遺跡の如き単位集団がなしたものであろう。そのほか、小田切川右岸段丘上にもこうした遺跡が発見される可能性があると思う。今年度から駒ヶ原台地は県営甫場整備工事が本格的に実施される段階にあるので、あるいは、一型式内での集団の移動を具体的にとらえることが得られることに期待を寄せているものである。（友野）



図5. グリッドの設定

第2節 縄文時代の遺構と遺物

第4号住居址と出土遺物（図6・7，表1）

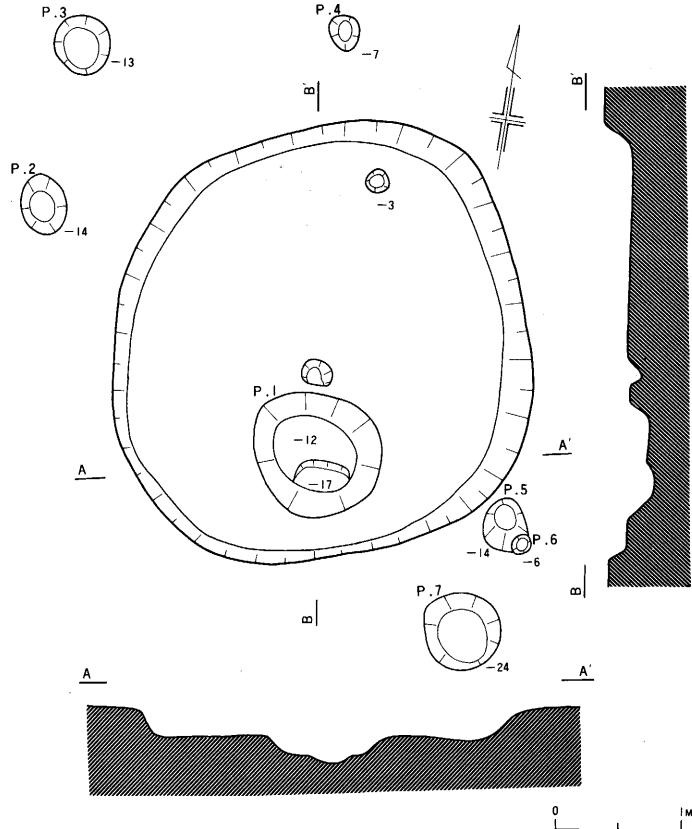


図6. 第4号住居址 (1:60)

E 6 — グリットを掘り下げる段階において、水田の地場層を除去すると、削平された黄褐色のローム面に暗褐色の落ち込みがあることが認められた。確認面での平面プランは小さな円形のもので、土塹かとも思われたが、隣接するいくつかのグリッドを掘り下げ拡張した結果、ほぼ図6に近いプランが確認された。覆土の色は周囲のロームと極めて似ており、竪穴の壁、床は軟弱であったため、それらの検出は感覚的にもかなり難しい点があった。覆土には径1～2cm程度のローム・ブロックが多く混入していたが、これも覆土との識別は困難であった。また覆土には木炭らしきものは殆ど見られず、壁面の検出に際しては、移植ゴテの手を休めて検討しなければならないことがしばしばであった。

掘り下がった竪穴部分は、径約3.5mの円形に近いもので、竪穴内には柱穴らしきピットは見当た

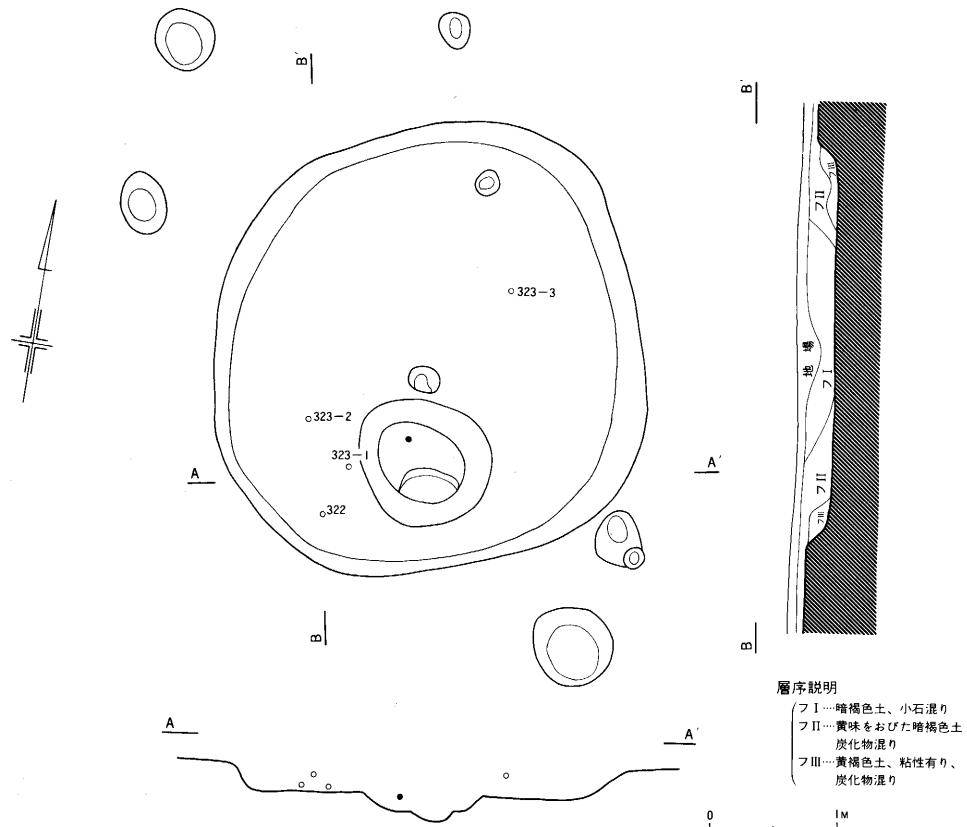


図7. 第4号住居址の遺物分布 (1:60)
(●縄文前期 ○石器)

台帳No	図	図版	分類	器種	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
322	37	14	石器	礫器	花崗岩			縄文・前期	
323-1	〃	〃	〃	磨石	砂岩			〃 〃	
323-2	〃	〃	〃	〃	〃			〃 〃	
323-3		〃	礫	(礫)	花崗岩			(〃 〃)	表面が風化

表1. 第4号住居址出土遺物

らないが、竪穴外にP.2～P.7がある。住居址に関係したものかどうかははつきりしない。

遺物はP.1の上部より前期の土器の小片が1片出土した以外は石器であった。図37-322は花崗岩を用いた礫器で、片刃のものであり、裏面は磨られている。刃部や使用痕は見当たらないが、同じく花崗岩の円形の礫(323-3)が出土しており、表面は風化してザラザラしている。図37-323-2は長楕円の河原石を用いた石器で、長軸の両端が使用されたものと思われる。図37-323-1は円形で扁平な砂岩の河原石の両面が磨られ、側縁がいわゆる「特殊磨石」と似た使用痕を示している石器で(ハ木光則19)、中越遺跡からは多く出土している。

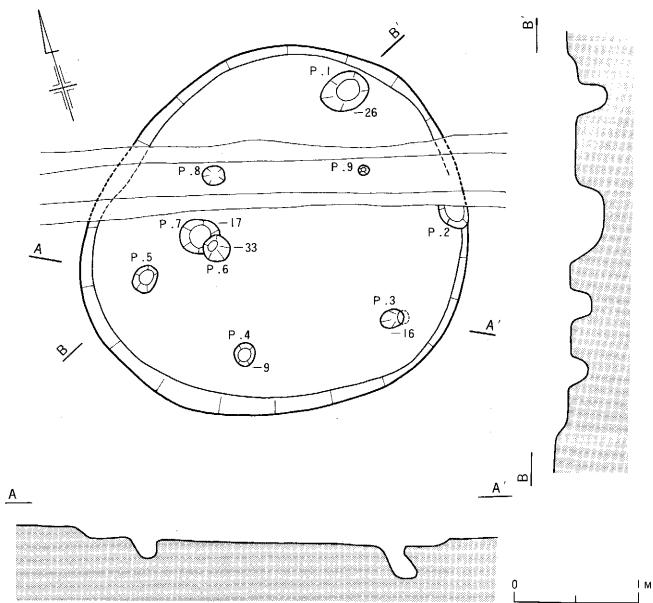


図8. 第5号住居址 (1:60)

第5号住居址と出土遺物 (図8・9, 表2)

第1号方形周溝墓の北側の周溝部分を掘り下げる段階で住居址の存在が確認されたもので、遺物はプラン確認前から多数出土した。付近は水田と水田との境に当たり、畦畔の下で、水田造成時にかなり削平されており、地場下の土層もかなり乱れていた。従って遺物が方形周溝墓調査時にもかなり出土しているものの、竪穴部分の壁高は10cmに満たないものであった。そのために、壁の検出は難しかったが、掘り上がった竪穴の規模は3.2×3.0mの不整円形で、竪穴内にはP.1～P.7の各ピットが穿たれていた。周溝内にもP.8、P.9があるが、この住居址に関したものかどうかは不明である。覆土は比較的黒味をおびており、この遺跡の前期の住居址としては、周囲のロームとの識別が比較的容易であった。これらのピットは、地場層直下であったために不明確なところが多く、柱穴と思われるピットもはっきりしなかった。

遺物は前述のように、周溝墓調査の段階で多数出土しており、今回調査された前期の住居址の中では最も竪穴が浅かったにもかかわらず、出土した遺物（土器）は量的に最も多いものであった。土器の大半は厚さ3～5mm程度の薄いもので、纖維を粘土中に含有した土器はわずかであった。薄手の土器はいずれも内面に指による成形痕が残るもので、表面は半割竹管と思われる工具による細い平行条線が引かれている。口縁部下数センチと思われるところには横走する隆帯状の盛り上がりがあり、その上には等間隔に刻目がつけられている。隆帯は粘土紐の貼付によるものではないと思われる。平行条線はこの隆帯部の上下に引かれ、隆帯の直下には隆帯と平行して引かれており、それ以外では交差している部分もある。図32-247は口縁部の破片で、口唇には上から押捺が加えられている。これらの土器は胎土中に多少砂粒が混入されているが、堅く焼かれている。266は胎土は

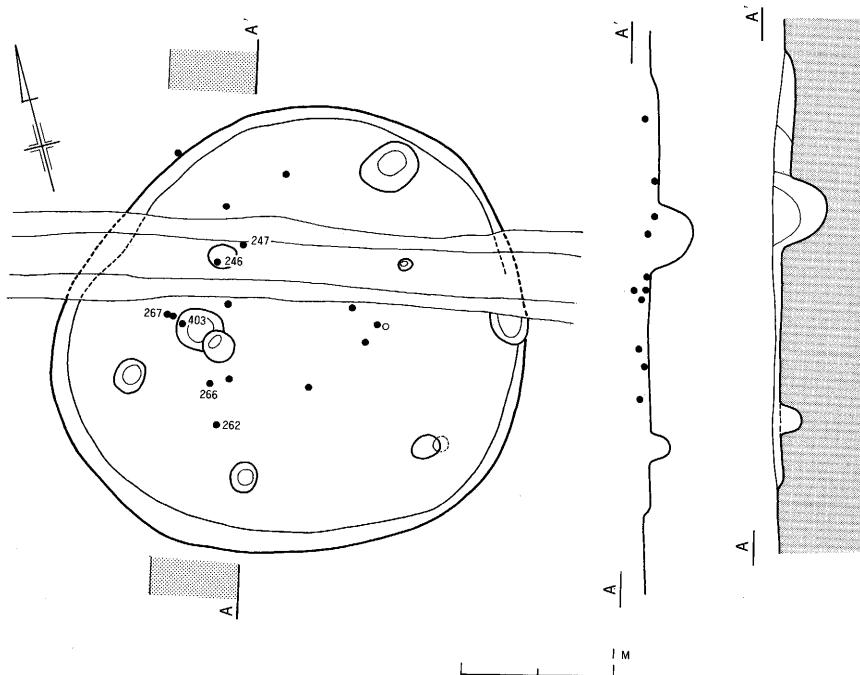


図9 第5号住居址の遺物分布 (1:60)
(●縄文前期 ○石器)

台帳No	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
246	32	12	縄文土器	深鉢形土器	胴部			223	縄文・前期	
247	〃	〃	〃	〃	口縁部			〃	〃	
262	〃	〃	〃	〃	頸部			223	〃	〃
267	〃	〃	〃	〃	胴部			〃	〃	〃
266	〃	13	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃
403	〃		〃	〃	尖底部			〃	〃	〃

表2. 第5号住居址出土遺物

これらと少し異っており、含まれている砂粒も多く、赤褐色に焼かれており、破片の下端にはいわゆる「つぎ目痕」が見られる。403は底部の破片で、尖底のものである。底部近くでわずかに屈曲している。外面には、火熱を受けたと思われる明らかな痕跡は見当たらない。外の表面は丁寧な器面調整がなされているが、内面には成形時の指痕が残っている。前述のように、纖維を粘土中に含んだいわゆる「纖維土器」は小片が2片ほど出土しており、いずれも縄文施文された厚手のものであった。以上の土器のうち、薄手のものは、対峙する中越遺跡、愛知県南知多町清水ノ上見塚遺跡（杉崎ほか1976）、同乙福谷遺跡（同）などに近似するものがあるが、細部についてははっきりしない。一方、厚手の纖維含有の土器は、この時期に東・北日本で一般的に出土するものとの関連が考えられる。

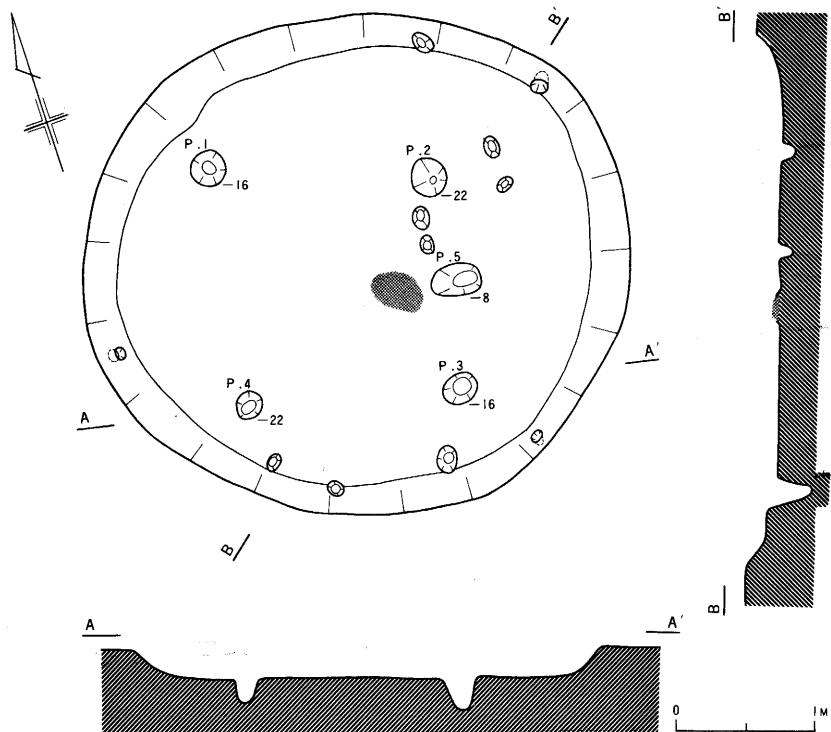
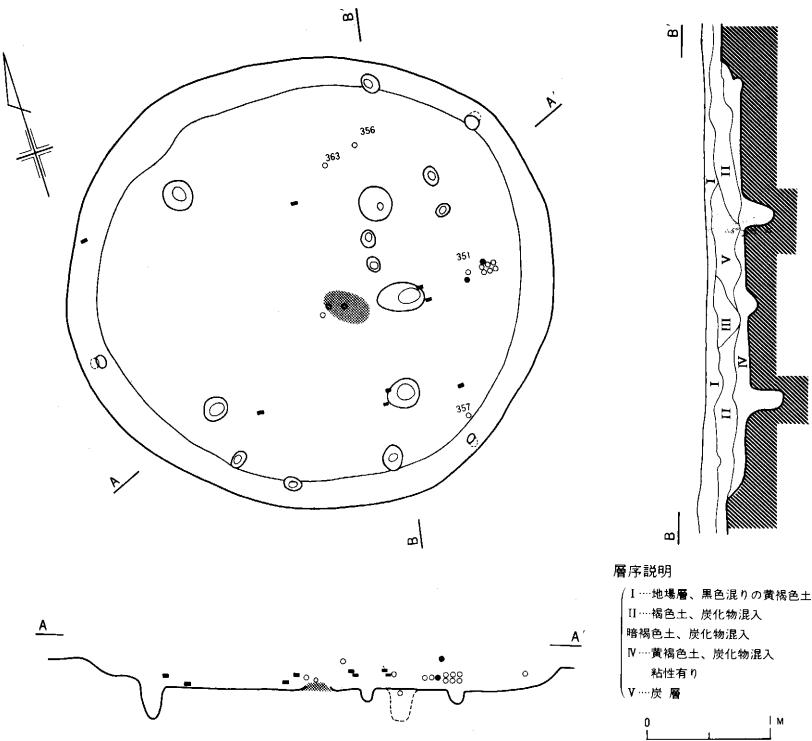


図10. 第6号住居址 (1:60)

第6号住居址と出土遺物 (図10・11, 表3)

第1号・2号マウンドの北に見つかったもので、この遺跡の前期の住居址としては最もその存在が容易に確認されたもので、プランなども整ったものであった。平面プランは確認時より円形であったけれども、東壁部分は開田工事などの影響で軟弱で検出は難しい点があり、第4号住居址と同様に、覆土には小さなローム・ブロックが混入しており、床面も決定し難いものであった。覆土にはまた細かな木炭粒と、それよりやや大形の木炭片が含まれていて、これが床面まで掘り下げる際のひとつの目安となった。比較的大形の木炭は長さ5~6cmの円柱状にはっきり残っていて、或いは上屋の焼けたものとも考えられる。(図11) 掘り上がった結果、図11に見られるように、円形の竪穴プランの中に、整然と柱穴が4本穿たれていたが、この柱穴内には暗褐色土が埋っており、木炭の小片が多く含まれていた。P.2-P.3間に長楕円形のP.5があり、その中には木炭混りの灰が充満しており、その西隣には焼土が堆積していた。焼土は褐色土が混るもので、その上面からは黒耀石のフレイクなど3点の石器(図33-351, 363, 356)が出土している。この焼土付近の3点の石器の集中とP.5をはさんで東には黒耀石のチップの集中した部分があり、8点ほどが出土した。土器の出土は比較的少なく、2点の少片が出土しているが、文様は見られず、焼成・胎土などの特長より前期のものと考えてよいと思われる。石器の351は尖頭器状になった大形の鎌で、黒耀石で作



台帳No	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
351	33	14	石器	鏃	(欠損)	黒耀石			縄文・前期	
356	〃	〃	〃			〃			〃	
363	〃	〃	〃			〃			〃	
359	37	14	〃			砂岩			〃	
357	38	15	〃	打製石斧		花崗片麻岩				

表3. 第6号住居址出土遺物

られている。363・365はともに黒耀石のフレイクにわずかな刃部を設けたものである。図37—359は4号住居址出土のものと同様のものであり、長楕円の砂岩の長軸の両端に使用痕が認められている。

以上のように、この住居址では石器の出土の仕方が炉と思われるP.5付近で特徴的であり、一方は3点の製品、もう一方は石器製作途上に生じるチップなどの集中という点に関しては注目すべきことと思われる。尚、この住居址では、遺構の出土の仕方の垂直的な観察ができ、それによれば、石器などの遺物は、床面と思われるレベルよりわずかに浮いた状態が観察された。

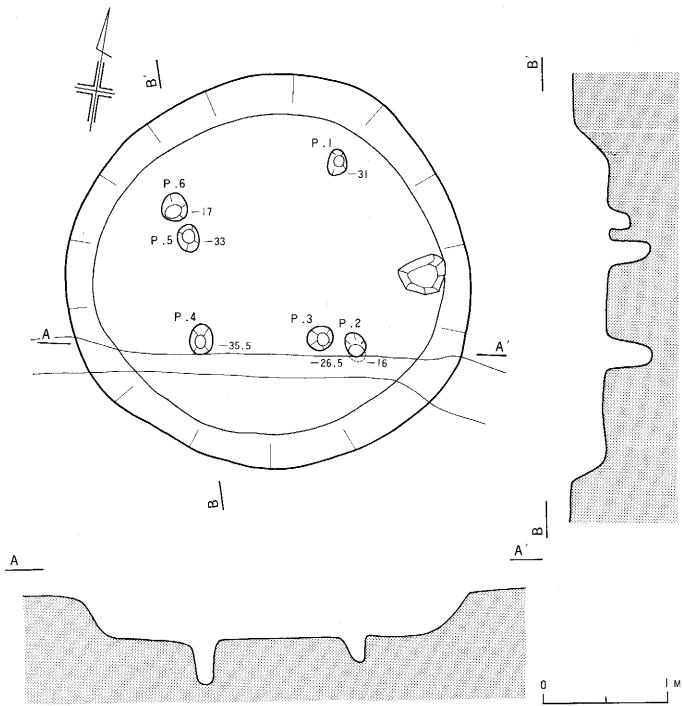


図12 第7号住居址 (1:60)

第7号住居址と出土遺物 (図12・13, 表4)

第2号周溝墓の西にあり、第3号住居址と切り合っていた第2号溝状遺構がこの住居址の南半を通っている。むろん溝が住居址より時期的には新しく、竪穴はその部分で破壊されている。掘り上った竪穴は、径3.2mほどの円形で、プラン確認面からの竪穴の壁高は30cmとこの遺跡のこの期の住居址としては最も深く、床面と思われる竪穴の底はやや堅い感じのするものであった。この円形の竪穴の中にP.1～P.6までがあり、P.2とP.3、P.5とP.6とが各々隣接するものの、ほぼ整然とした4本柱の上屋が想定できる配置をなしている。ピットの深さの均一性からすれば、P.1～P.3 P.4～P.5の4本が一組と思われるが、その位置からするとやや問題がありそうである。住居址の東壁直下には花崗岩の大きな礫が露出しているが、自然のものであり生活の営まれていた時期には果してどう意識していたかはわからない。

遺物は石器2点、土器1片が出土している。図33-151-イはチャートを用いたスクレイパーであるが、刃部の作出は簡単である。土器は図示しなかったが、焼成・胎土などの諸点から、今までのものと同様に縄文時代前期のものと思われる。

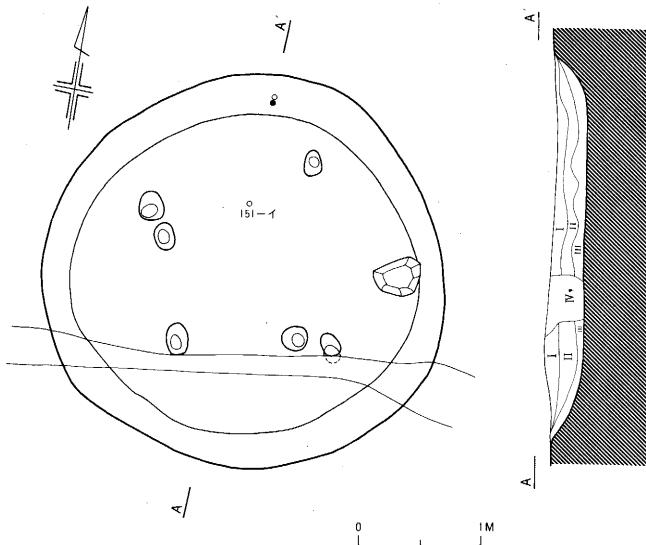


図13 第7号住居址の遺物分布 (1:60)
(●縄文前期 ○石器)

台帳No	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
151-イ	33	14	石器	スクレーパー		チャート			縄文 前期	

表4. 第7号住居址出土遺物

第8号住居址と出土遺物 (図14・15)

第2号方形周溝墓の南辺の溝を調査中に住居址の存在を確認したもので、住居址の南半部を周溝の溝が通っている。覆土はIV層の安定した黄褐色を除いて上部の覆土は地場層直下で攪乱されている部分もあり、複雑に土層が入り組んでいる。

掘り上がった竪穴の規模は、東西3.3m、南北3.4mの円形で、確認面から竪穴の深さは、25~30cmであった。竪穴内には整然とP.1~P.4までの柱穴があり、竪穴内のほぼ中央には浅い凹みがあり、わずかな焼土が認められた。炉とは言えないまでも、屋内で火を使用した場所と考えてよいであろう。竪穴外西側には、2つの花崗岩の平たい礫があり、中越遺跡をはじめ、阿久遺跡（註）などで竪穴内の炉の近くから見つかっているものに似ているが、火を受けた痕跡は認められない。遺物は覆土のやや上部よりフレイクなどの石器4点と、土器片の小片が出土している。

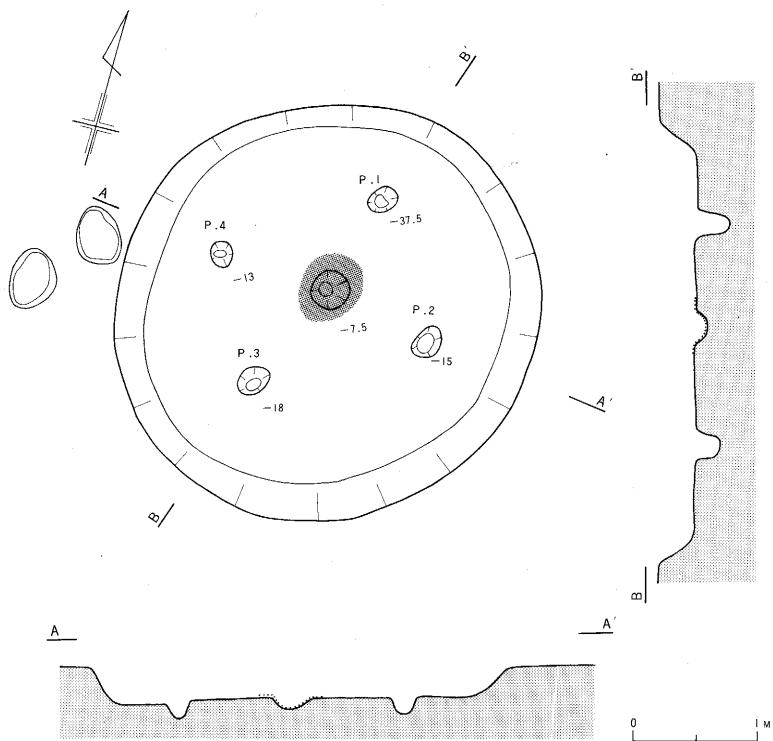


図14 第8号住居址 (1:60)

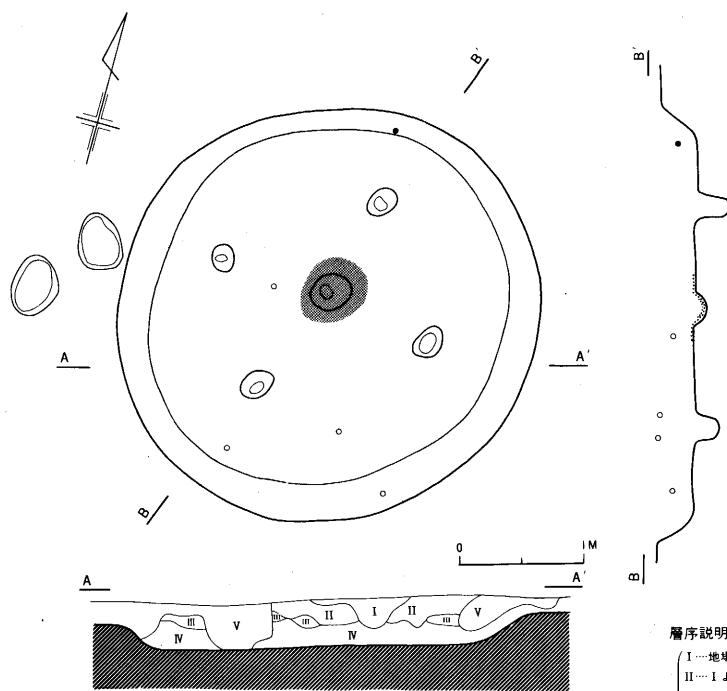


図15 第8号住居址の遺物分布 (1:60)
(●縄文前期 ○石器)

層序説明
 I…地場層、黒褐色土
 II…Iより黒い黒褐色土
 III…暗い黄褐色土
 IV…黄褐色土
 V…擾乱層

第9号住居址（16図）

発掘区の北端に、前述してきた前期の住居址群とはやや離れて、S-16グリッドを掘り下げる段階で存在を確認された。しかし、竪穴の覆土の色調は周囲のロームと極めてよく似ており、壁床の検出にはかなり苦労した。竪穴は径3.2mほどのほぼ円形で、竪穴内にはP.1～P.7のピットがあるが、柱穴と想定できるものは明確でない。6本柱かとも思われるが、P.3の東には離れてP.2があり、無理のようである。遺物は1点も出土しておらず、覆土も前述の住居址と異なってよく似た2層が単純に堆積しており、或いは、日常の住居生活の場としての住居とするには問題があるかもしれません。（赤羽）

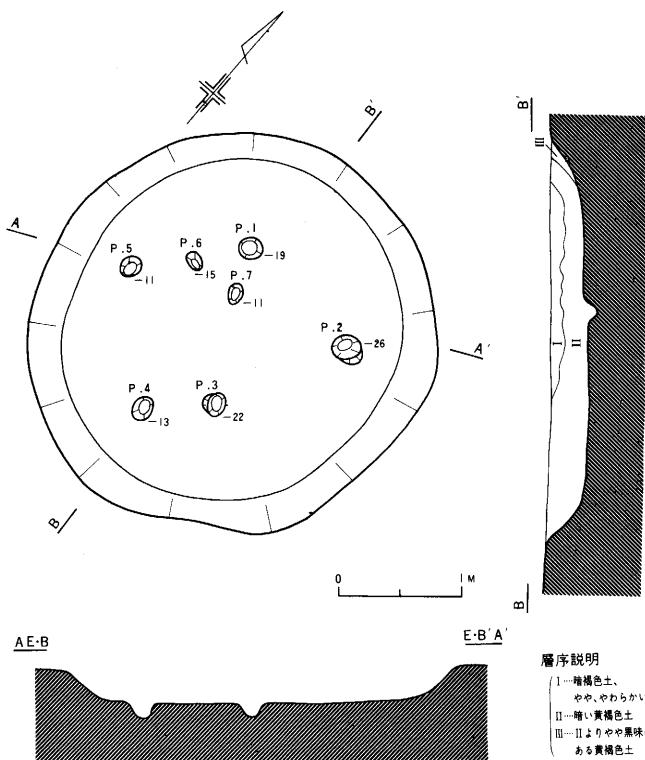


図16 第9号住居址 (1:60)

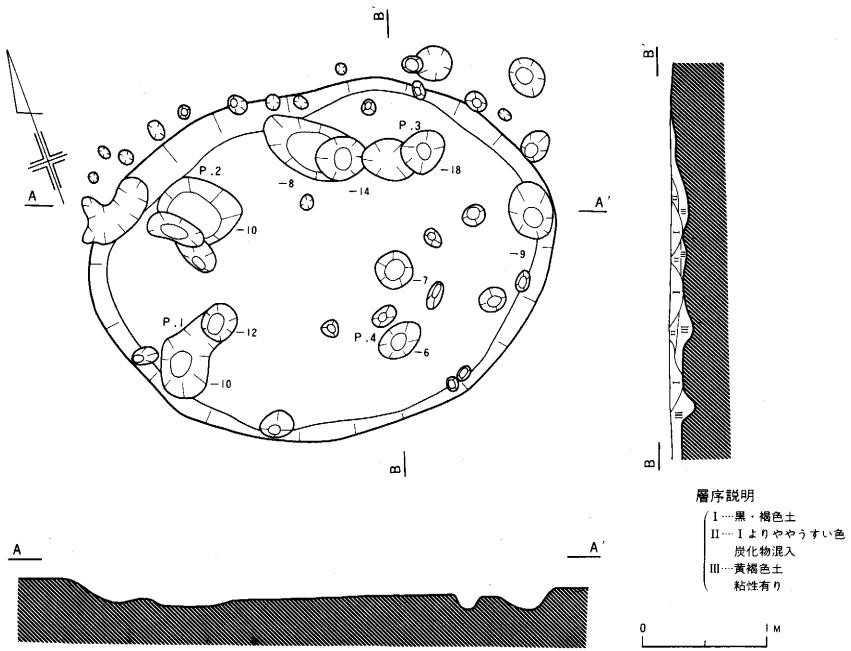


図17 第10号住居址 (1:60)

第10号住居址と出土遺物 (図17)

調査された住居址の中では南端に位置している。楕円形の住居址で東西3.8m、南北2.8mの大きさ主軸方向はN 78° Wをはかる。壁は内側に斜めにほられ、壁高は北側で5cm、南で10cm、東では13cm、西壁では14cmをはかる。床面はやわらでよくない。主柱穴は4本と考えられる。他にも幾つかのピットが検出された。また、壁の内側に向って10~12cm内外の小穴が不規則ではあるがぐるっとまわっているのは、縄文早期末から前期前半の住居址によく見受けられる。そのほか、壁外北側にも同形の小穴が発見された。遺物は発見されなかった。

第1号ロームマウンド (図18・19)

第6号住居址の南側に位置する。東西の長さ1.2m、南北は2.3m、溝の深さは25~35cmをはかる。溝は褐色土層の自然堆積である。マウンドの上面はカマボコ形を呈している。遺物は溝の東側より無文の前期の土器片が1片出土したのみである。

第2号ロームマウンド (図18・19)

第1号ロームマウンドの南側に接して発見された、東西2.5m、南北1.1m、溝の深さ35cm、楕円形、上面は北に傾いたカマボコ状をなす。溝は褐色土が自然堆積した状態である。遺物は北側の溝の上面に検出された、縄文前期の土器である。(友野)

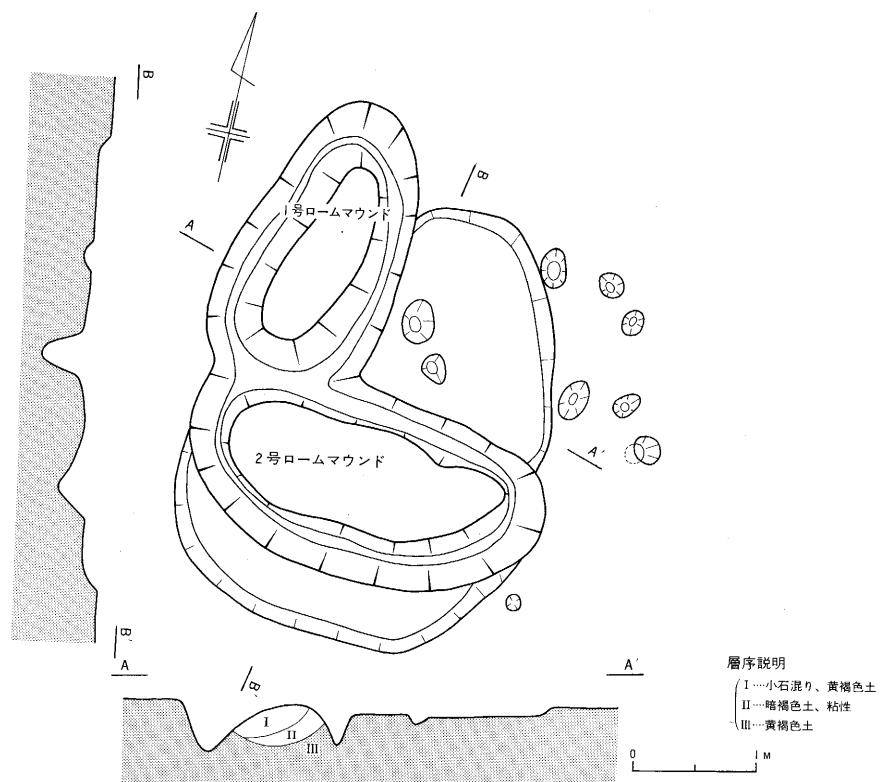


図18 第1号・2号ロームマウンド (1:60)

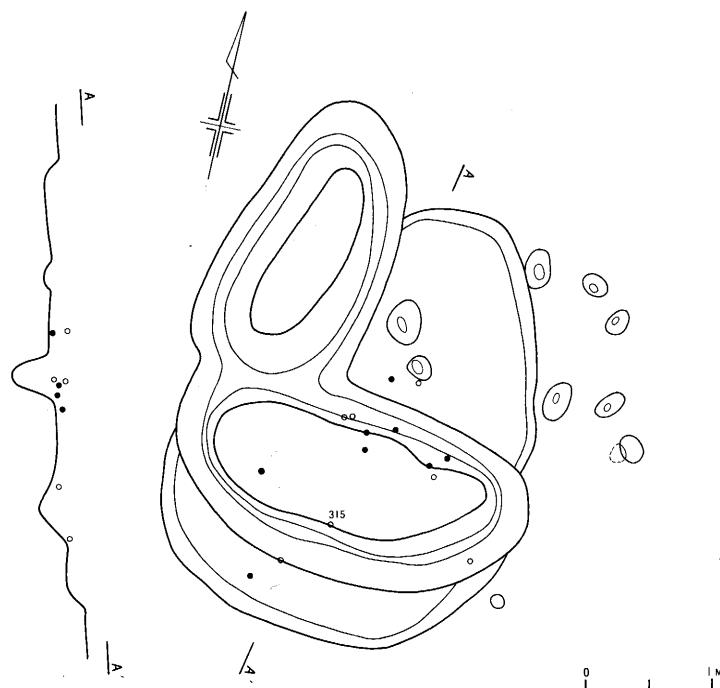


図19 第1号・2号ロームマウンド遺物分布 (1:60)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

第4号住居址 (図20・21)

調査された住居址の中では一番北端に発見された住居址である。住居址は南北6m、東西4.9mの長方形である。この住居址は駒ヶ原耕地整理工事が行なわれた時、ほとんど壁まで削り取られ、辛じて床面が残つたものである。したがって、遺構の正確なプランをつかむことができない状態である。住居の主軸の方向はN-E25°をはかる。床面は半分南側にやわらかな箇所が見受けられた。主柱穴は4本で、P.1は東西50cm南北32cm深さ56cmの隋円で底部は東にわずかかたむいている。P.2は、P.1と同様東西に長い半割形の柱穴、東西56cm南北46cm、深さ70cm、底部は東西27cm、南北9cmでやや丸底でかたい。P.3は掘込は三角状であるが底部はP.1、P.2と同様の形状である、東西46cm、

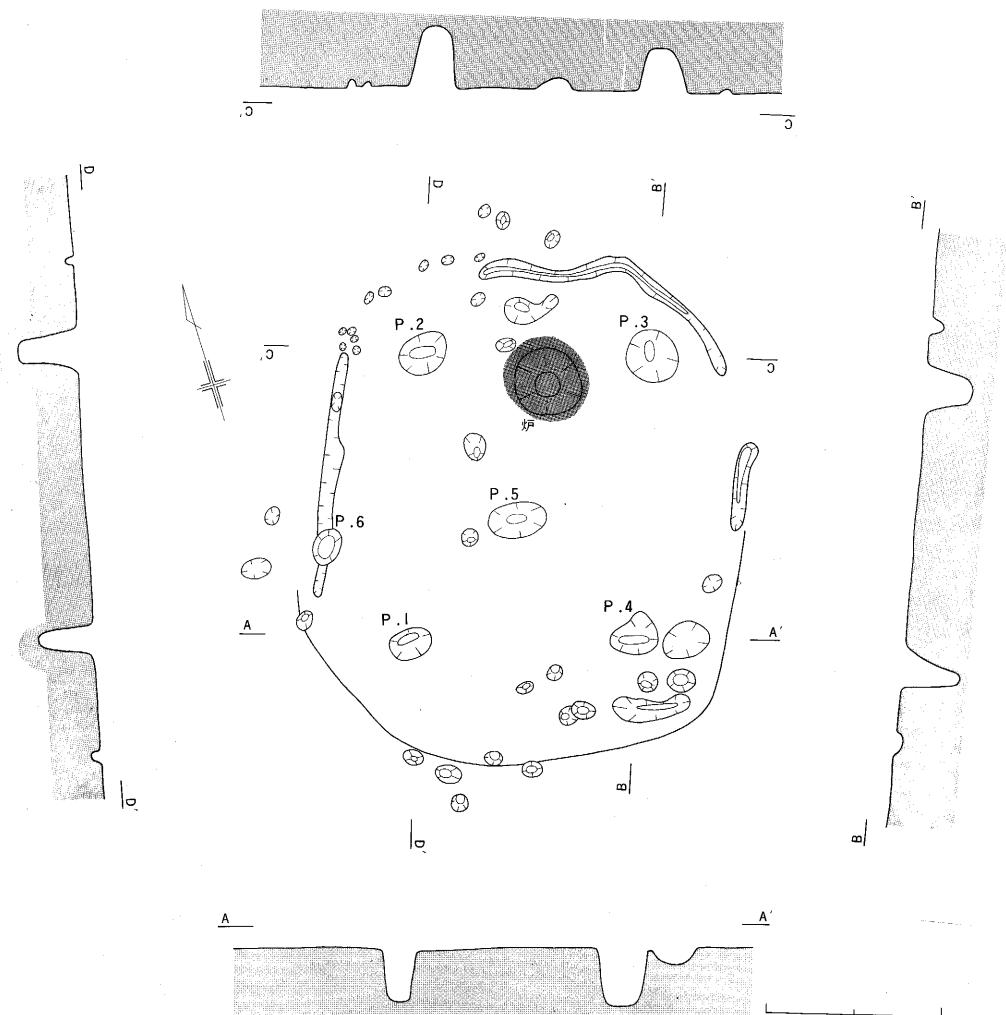


図20 第4号住居址 (1:80)

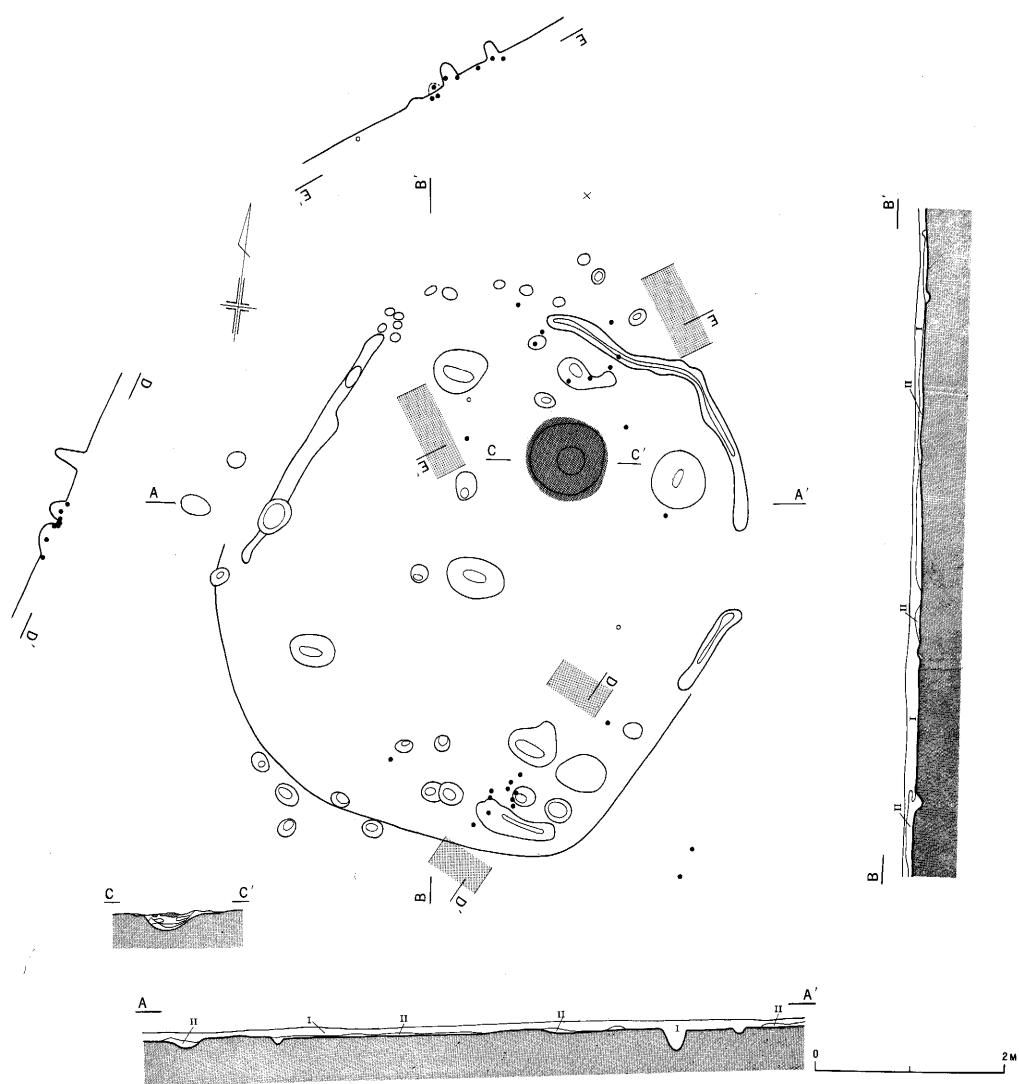


図21 第1号住居址の出土遺物分布 (1:80)
(●弥生 ○石器 ×鐵製品)

南北56cm, 底部は東西18cm, 南北29cm, 深さ50cm, で東側に掘形の中段が認められる。この柱穴のみが南北に掘られている。P.4は、東西50cm, 南北50cm, 深さ60cm、北に三角状に掘り込まれてはいるが、底部はP.1, P.2, P.3と同様東西25cm南北10cmの隋円形である。柱穴のほかに床面上に大小のピットが検出された。P.5は住居址の畳中央にあり東西62cm、南北46cm、深さ17cmの隋円の凹みで、直接建築上に関係したものとは考えられない。P.6は両壁の溝の中に検出されたピットで東西30cm, 南北40cm, 深さ22cmをはかる。溝の中にあるので壁の保護か母屋桁を支える小柱か明らかでないが、いづれかに關係するものと考えられる。そのほか溝中に認められる径10cm内外の小穴は壁の保護にかかわっているものと思われる。P.4の附近には7個の小穴が発見されているが、使用上のことは不明である。遺物はこの附近がいちばん多く見つかった。周溝は西側と北側がいちばん良く残った状態である。南側と東側はほとんど削り取られわずか線状にその痕跡を止める程度であった。壁外にも小柱穴と思われる小穴を検出することができたが、これが直接上屋構築に結びつくのかは明らかでない。炉址はP.2とP.3との中間に発見されたもので、焼土は径80cmの広さに認められたが、埋甕は検出されなかった。遺物は炉址の北西に多く検出された。

第2号住居址 (図22・23, 表5)

本住居址は、第1号住居址の南側に発見された。東西6.7m, 南北5.85m, 隅丸長方形の竪穴住居址である。主柱穴は4本でP.1は、東西27cm南北44cm深さ50cmの隋円形で底部は東西10cm南北24cmをはかる。形状は隋円形である。P.2は、東西54cm, 南北46cm, 深さ55cmの隋円形で底部は東西31cm, 南北10cmの隋円形。P.3は、東西40cm, 南北30cm, 深さ50cmの隋円形で底部は、東西24cm, 南北9cmの隋円形。P.4は、東西50cm, 南北25cmの隋円形で底部は、東西30cm, 南北7cmの隋円形、4本とも同一方向を向き形状も同じ隋円形をなしている。柱は割材を使用したのではなかろうか、柱穴の深さも50~60cmと一定している。床面はよく踏み固められてかたい。壁も西側の一部を残して3方は削り取られ痕跡をとどめない。周溝は北面の一部に検出されたのみで、他には認められなかった。周溝の巾は20~26cm内外で深さは7~10cmをはかる。P.5, P.6 東側壁に発見されたが建築上の位置については不明である。P.7, P.8も壁と壁に接して検出されたがP.5, P.6と同様である。そのほか中央の径11.5cm円形のP.9は、1号住居址と同じ状態であると考えている。またP.9附近には10個の小穴が発見された。これも1号と同様な性格をもっているかもしれない。壁外施設は認められていない。炉址はP.2とP.3の中間の位置に径85cmの焼土が発見され、地床炉であることが確認された。遺物の出土状況は住居址の南側に多い分布状態である。また遺物の多くは床面上に分布している。

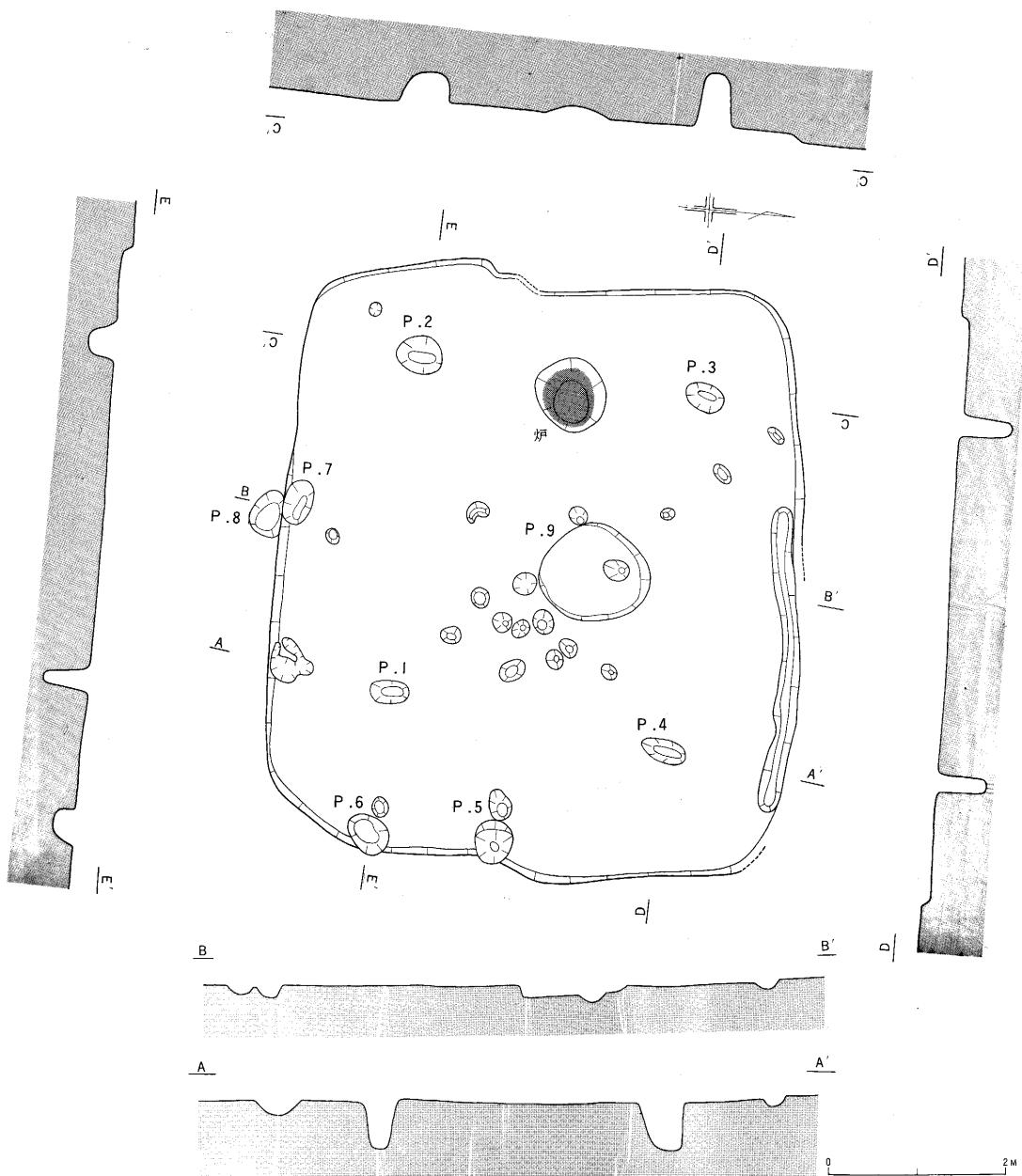
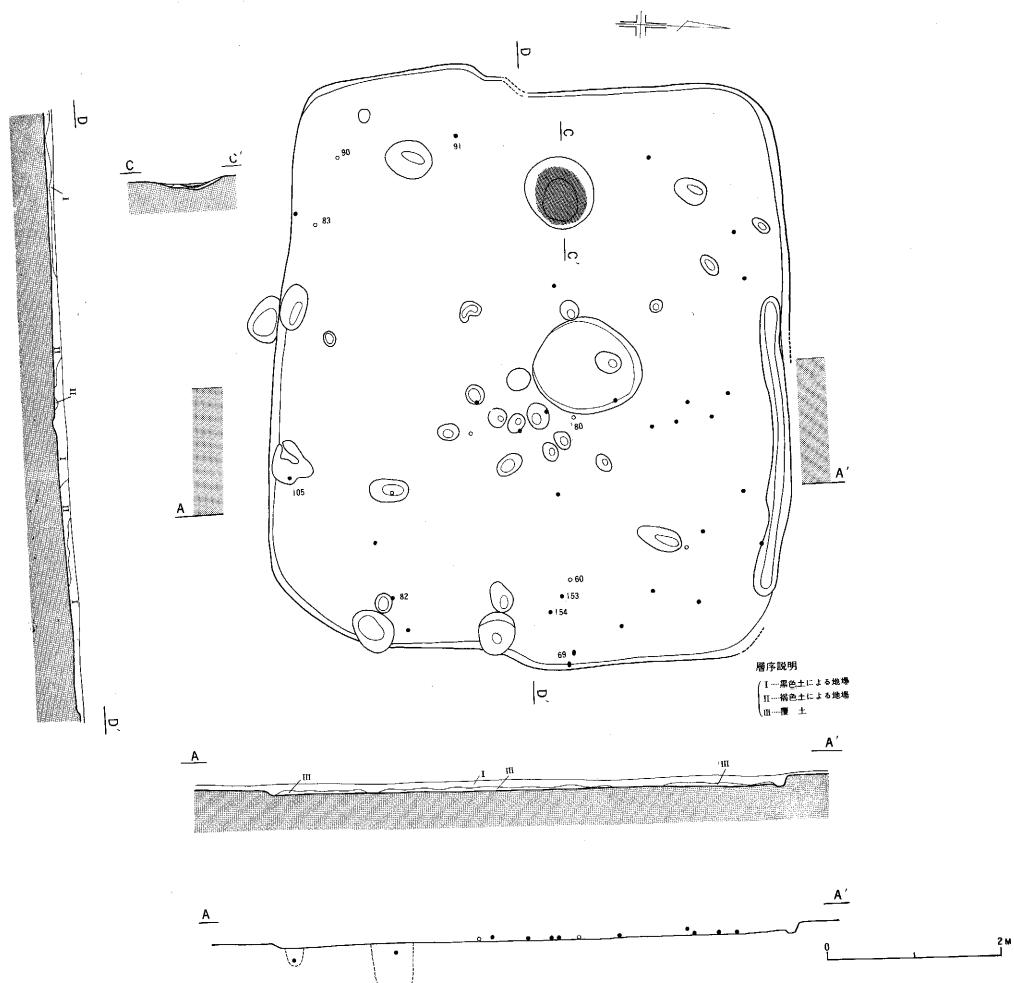


図22 第2住居址 (1:80)



台帳No.	図	図版	分類	品種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
91	35		弥生土器	甕形土器	頸部				弥生・後期	
154	ク		〃	〃	〃				ク ク	未製品?
83	33	17	石器	磨製石鎌		(粘板岩質)			ク ク	
153	ク	ク	〃	〃	欠損	(ク)			ク ク	
60	34	ク	(ク)	同未製品	ク	(ク)			ク ク	
69	ク	ク	(ク)	〃		(ク)			ク ク	
82	ク	ク	(ク)	ク		(ク)			ク ク	
90	ク	ク	(ク)	ク		(ク)			ク ク	
80	37	15	石器	砥石?		花崗岩			ク ク	火熱をうけている
66	ク		ク?			緑泥質砂岩				
109	ク		ク	石皿		花崗岩				ピット中

表5 第2号住居址出土遺物

第3号住居址 (図24・25, 表6)

第3号住居址は、第2号住居址の南に位置する。住居址のプランは東西5.1m, 南北6.1m, 深さ西壁で15cm, 北壁で17cm, 東壁で20cm, 南壁では16cmの隅丸長方形の竪穴住居址である。主柱穴は4本, P.1は, 東西37cm, 南北36cm, 深さ60cmで底部は東西27cm, 南北9cmの隋円形である。P.2は, 東西50cm, 南北34cmの大きさで掘り込まれ, 底部は, 東西29cm, 南北9cmの平割柱の掘形である。P.3は, 南北38cm, 東西25cm, 深さ70cmで, 底部は, 東西28cm, 南北9cmでP.2柱穴址と同じ寸法を示している, 本柱穴も平割の柱を使用したのではなかろうか。P.4は, 東西52cm, 南北36cm, 深さ70cmで底部は, 東西28cm, 南北8cm西方は直立に近く掘り込まれている。柱穴は4本共, 長い方向27~29cm, 幅は9cm3本, 8cm1本と畳同径である点注目しなければならない。また, 深さも3本が70cm, 1本が60cm, これもほとんど同じ深さであるのもおもしろい。このほか補助柱穴などは認められなかった。

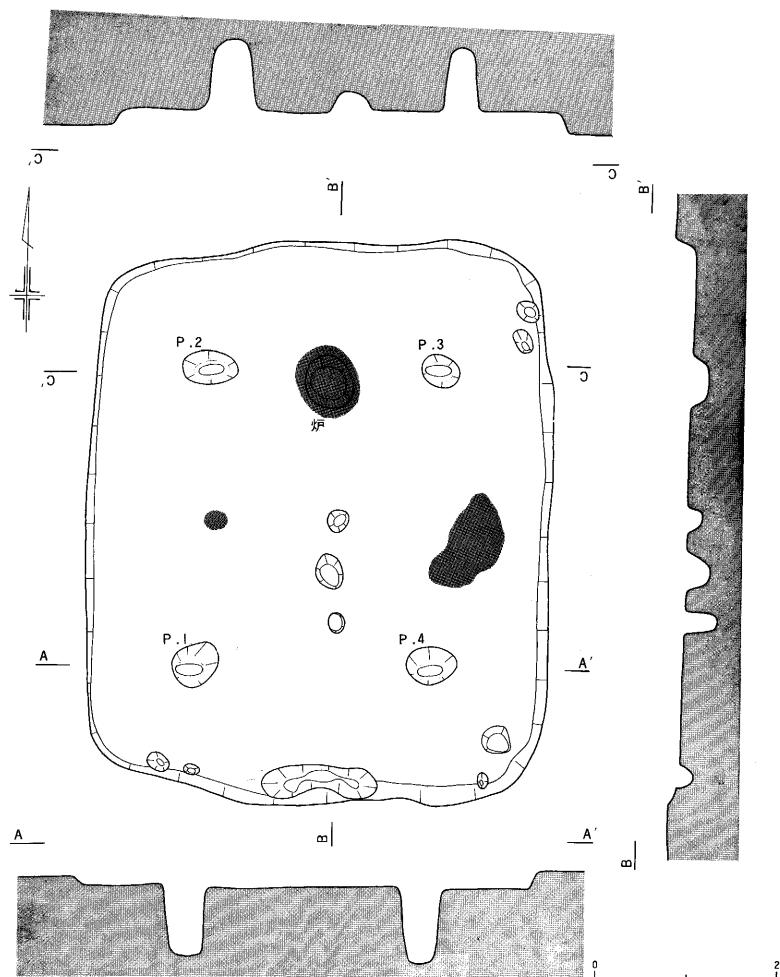


図24 第3号住居址 (1:80)

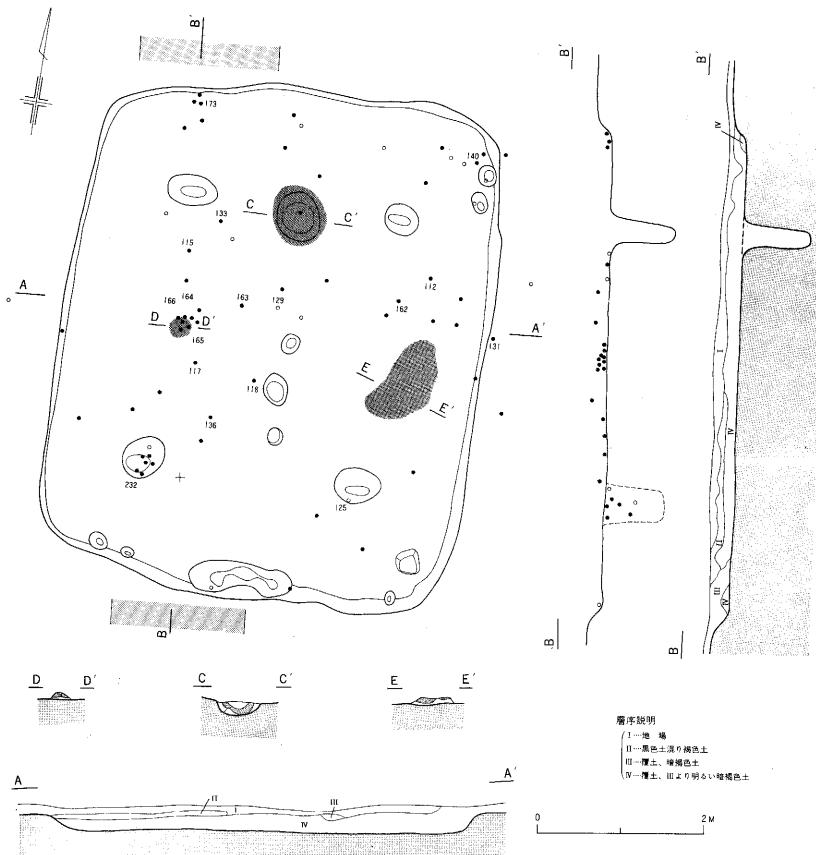


図25 第3号住居址の遺物分布 (1:80)
(●縄文前期 ○石器 ×陶器)

台帳No.	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
164	35	18	弥生土器	甕形土器	口縁部		153		弥生	
229	✓	✓	✓	✓	✓	✓	○		✓	
231	✓	✓	✓	✓	✓	✓	○		✓	
163	✓	✓	✓	✓	頸部		○		✓	
232	✓	✓	✓	✓	✓	✓	○		✓	
173	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
118	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
334	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
330	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
131	✓		✓	✓	胴部				✓	
112	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
237	✓		✓	✓	口縁部				✓	
212	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
117	✓		✓	✓	✓	✓			✓	
240	✓		✓	✓	✓	✓			✓	

台帳No.	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
133	35	18	弥生土器	甕形土器	胴部				弥生	
115	〃		〃	〃	底部				〃	
93	33		石器	磨製石鏃	(欠損)	(粘板岩質)			〃	
165	〃		〃	〃	(〃)	〃			〃	
129	34		(〃)	同未製品		〃			〃	
176	〃		(〃)	〃		〃			〃	
125	37		石器	砥石?		花崗岩			〃	
95	〃	15	〃	?	(欠損)	砂岩				
332		16	〃	大形のフレイク		〃				
141		17	石器	フレイク		砂岩				
171		15	(〃)	(礫)		緑泥質砂岩				

表 6. 第3号住居址出土遺物

床面は西から北にかけては良好であるが、南半分程は部分的にはよく踏み固められていたが、総体的にはよくない。床面は東南の方向にやや傾斜する。床面の施設としては柱穴のほかに焼土がP.1とP.2の間に検出された。また、P.3とP.4の中間にも焼土が発見された。この焼土は床面にぽこんと乗かっているという状態であった。炉址は、P.2とP.3の中間の位置にあり相当長期間使用されたらしく、床面の下までよく焼けた地床炉である。P.1とP.4の間に東西約1.5m南北1.5m三角形状の落込みが検出され床面を切って掘り下げると、深さ30cm擂鉢状の落込みとなった。この落込みは拡張前の古いものを埋めて作られていることが確認された。その外P.1の南側壁に接して掘り込みが発見された、この落込みは余り深くはなく床面から20cm下がっていた。主軸の方向中央に並列にピットが検出された。この2個のピットは東西の梁に渡して、それに結束して建られた中梁を利用した間仕切用の柱の穴か、あるいは、作業上掘られた穴かは明でないが、伊那地方の弥生時代後期の住居址によくなる例である。北側の壁を幅50~60cm、深さ60cm箱ヤエンに掘られた溝で切られている。この溝状遺構は平安期の陶器が出土しているところより、その時期のものではないかと推定される。

第4節 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (図26・27, 表7)

1号周溝墓は、調査区域内では南東に当たる所に発見された。周溝の規模は、東西7.8m, 南北7.4m, 長軸はN 8° Wである。南側の溝は東南の角で溝状の遺構が切った形であるが、僅か高い箇所が見受けられるところより、第2号周溝墓の陸橋の様な状態ではなかったかと思われる。南側の溝長さは6.1m, 巾35cm, 深さ23cm舟底状を呈している。溝は自然に埋まった状態である。溝底からは1点弥生後期の土器片が発見された。西側の溝は長さ6m, 巾31cm, 深さ37cm, 舟底形のものである。北側の溝は長さが7m, 巾50cm, 深さ30cm, 底は舟底を呈している。遺物は縄文時代ものが封土中

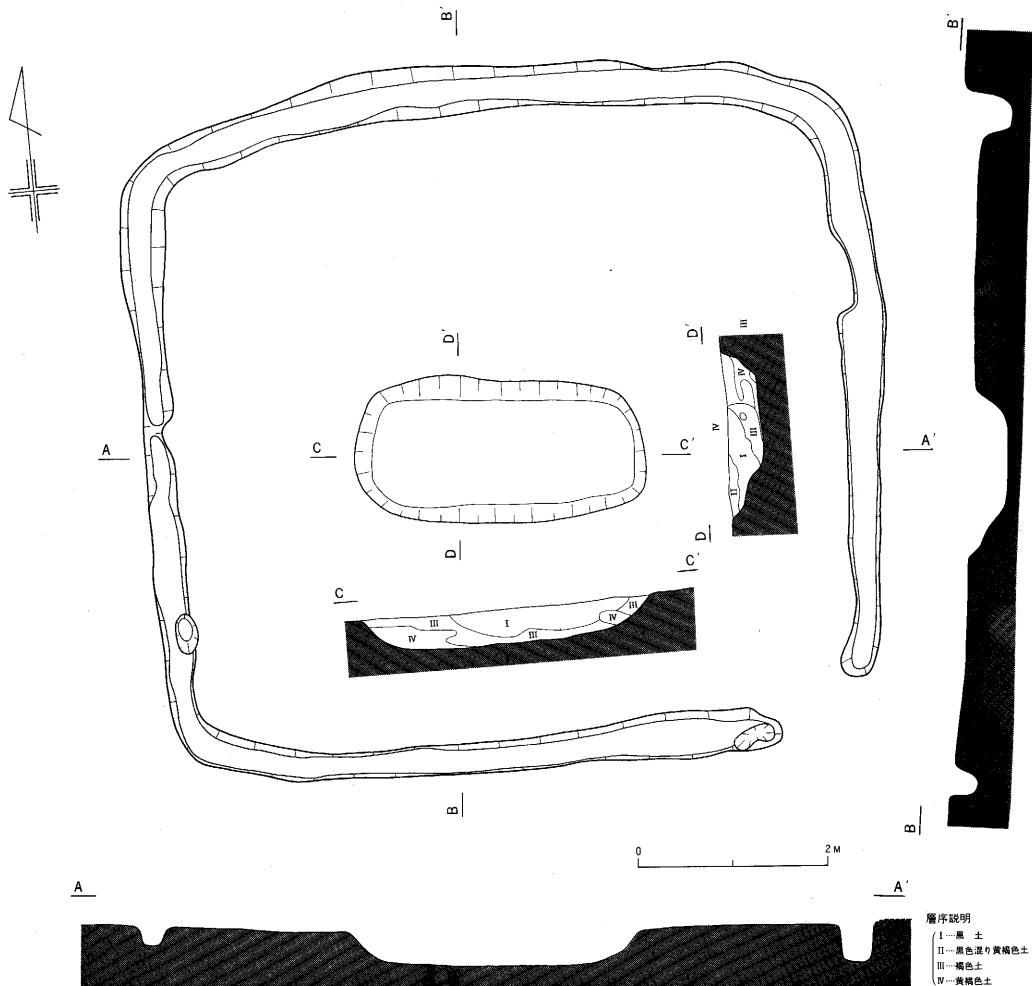


図26 第1号方形周溝墓 (1:80)

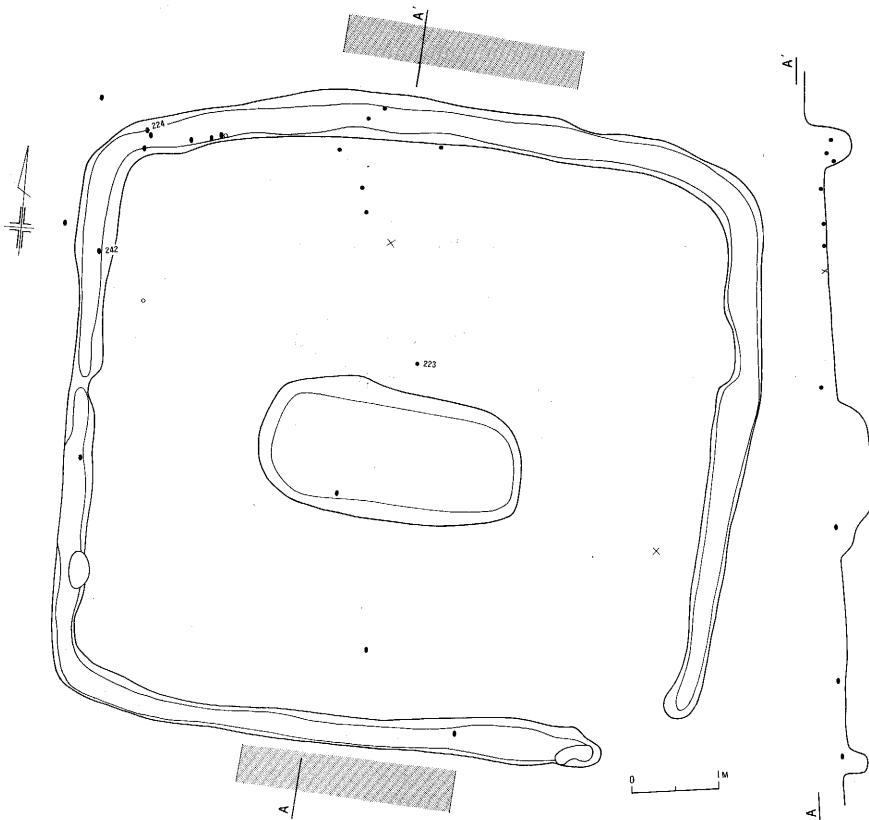


図27 第1号周溝墓の遺物分布 (1:80)
(●縄文前期 ●弥生 X陶器 ○石器)

台帳No.	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
223	32		縄文土器	深鉢形土器	頸部				縄文・前期	
224-1 +242	36		弥生土器	甕形土器	口縁部		224+242	271 224-2 224-3	弥生	
224-2	〃		〃	〃	頸部				〃	
224-3	〃		〃	〃	〃				〃	

表7. 第1号方形周溝墓出土遺物

から検出された。北側の溝は縄文前期の5号住居址を切って作られたものである。

東の溝は長さ6m、巾45cm、深さ35cm、この溝は宮田農協が作業のため堀りおこし場所であるので、周溝の上半は削り取られており、上半の状態は不明である。主体部は畠中央にあり、長軸の長さは3m、巾1.5mの長方形で深さは40cm、N87°Wの方向に作られている。テラス面は、駒ヶ原耕地整理が行なわれた時、南半分は一部削り取られているらしく南西に傾斜している。北側は幸い削られなかったので、住居址は保存された形となった。遺物は主に北側の溝附近に集中している。土壌内の覆土中に弥生時代後期の土器片が出土した。

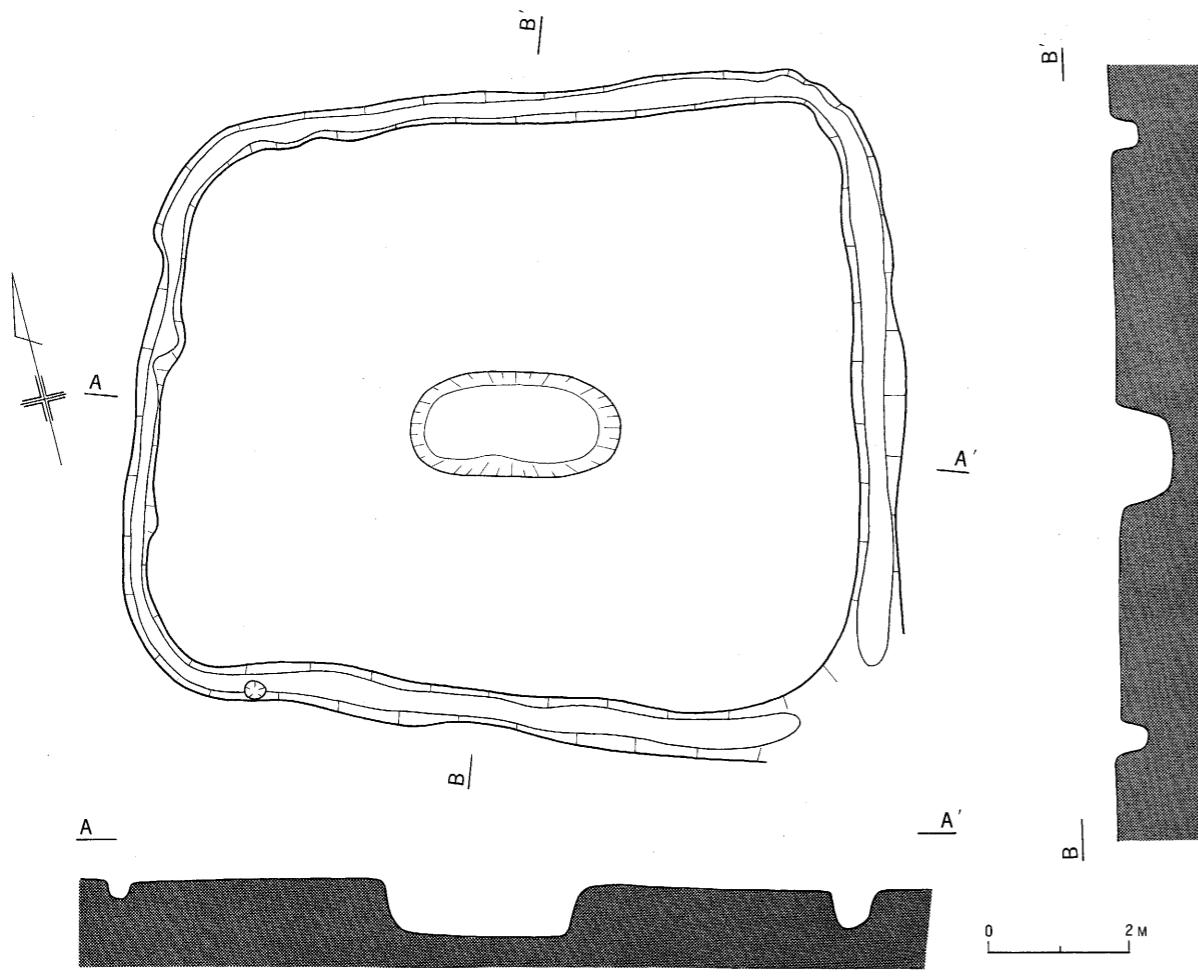


図28 第2号方形周溝墓 (1:80)

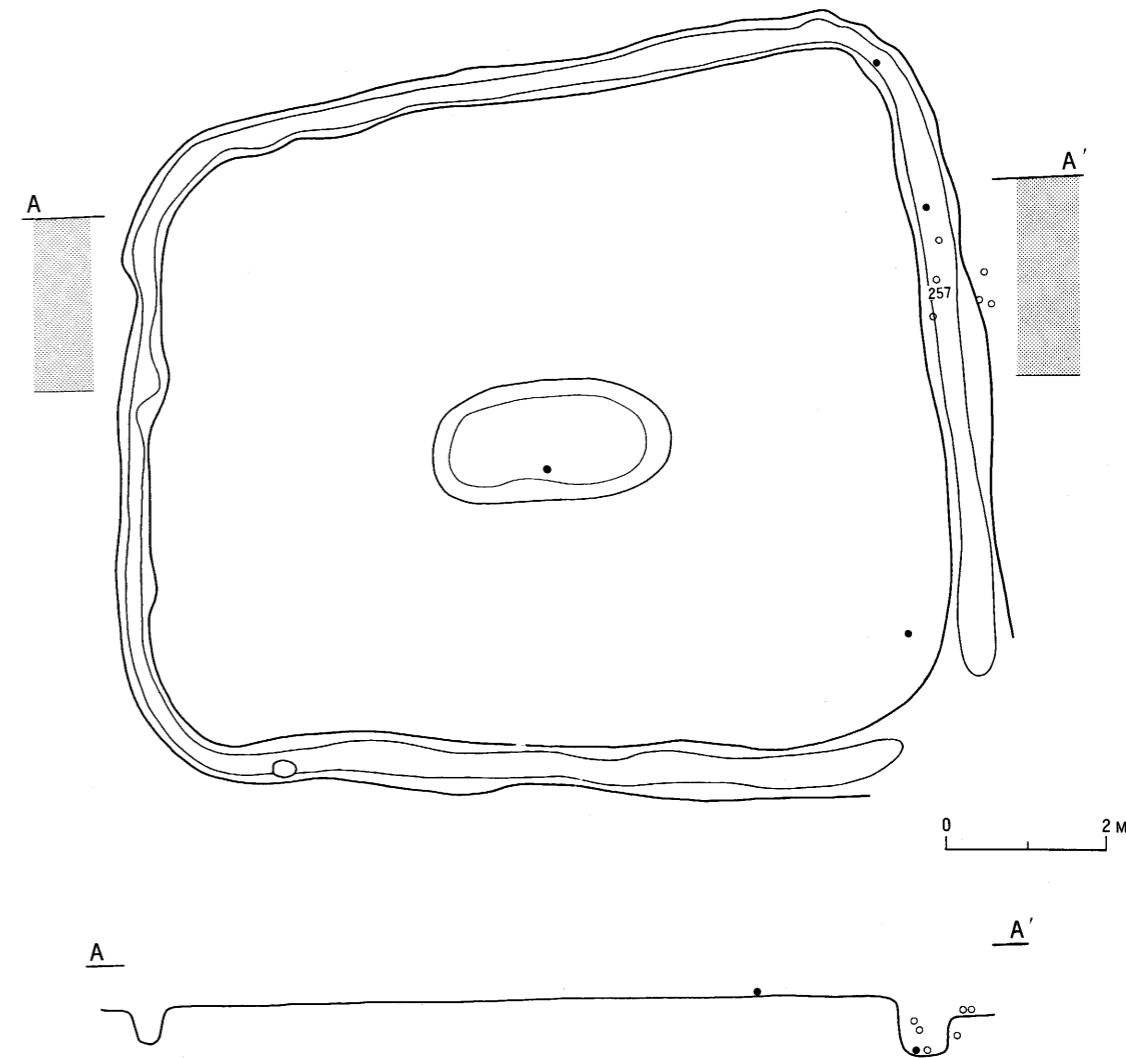


図29 第2号方形周溝墓の遺物分布 (1:80)
(●縄文前期 ○石器)

第2号方形周溝墓 (図28・29)

第2号方形周溝墓は、第1号周溝墓の北側に発見された。東西11m、南北9.1m、長軸はN-98°-Wで南東の向に陸橋がくる。溝を詳細に説明すると、南側の溝は駒ヶ原耕地整理工事の折に上面の一部が相当削り取られたうえ、その後の耕作などで攪乱され溝も浅くなっている。溝の長さは東西9m、巾60cm、深さ40cm、底は舟底を呈している。西側の溝は南北7m、巾35cm、深さ25cm、底は舟底である。北側の溝は、東西の長さ8.5m、巾50cm、深さ35cm、やはり舟底である。

東側は南北の長さ7.8m、巾60cm、深さ50cmを測る。テラスの面は東側の一部を除いては、駒ヶ原耕地整理工事のおり削られているため凹凸が多い。土壌はほぼ中央に検出された。東西3m、南北1.5m隅丸の長方形をとるものである。深さ67~70cm、底面は軟弱である。

遺物の分布はテラス上には陸橋に接して出土した260は弥生後期の土器片、土壌の東の位置に発見された238は弥生後期の無文の破片。東側溝の周辺からは252の焼石、257の磨製石鎌未製品等が出土。土壌内覆土中から256の弥生後期の土器片が発見された。(友野)

第5節 その他の遺構と遺物

第1号溝状遺構と出土遺物

第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓との間に、両者の北辺、南辺に平行して西から東へ伸びているもので、西に浅く、東へ行くに従って深くなっている。周溝墓のコーナーをはずれるあたりで北へやや向きを変えており、遺物はその屈接した付近から東側へ集中して出土した。この集中した部分からの出土は弥生土器が殆どであり、第8号住居址と隣接する中央部付近では、図32、284・300のような縄文前期の遺物が出土している。284はその出土地点の南側の第5号住居址の土器とよく似ている。300は、胎土中は砂粒を含み焼きのもろい土器で、つまり上げたと思われるような隆帯状のものがあり、器面には先端の鋭い施文具による細い線が横に引かれている。

一方、第8号住居址に近い西端近くでは、溝の北側から、縄文前期の土器が集中して出土しており、現場はやや凹状になっているだけであるが、或いはここに一軒前期の住居址を想定できるかもしれない。この集中区出土の前期の土器は、第5号住居址出土の一群と文様施文の点においてやや異つておらず、沈線一本一本間の間隔が広く、別の一群として捉えられるものと思われる。

その他の遺物

第3号住居址の北辺から第7号住居址付近にかけて、断面U字形の溝（第1号溝状遺構）があり、覆土中より灰釉陶器の破片が1片出土している。溝の底には砂らしきものの堆積もなく、時期的にも、性格的にも不明のものである。

以上の各遺構以外からも各種の遺物が出土している。図36の最下段の3点は縄文時代のものでA¹²—16グリッドからは吊手土器の吊手部分が出土しており、203は、A⁷—17グリッドより出土した縄文時代後期の土器でいわゆる「磨消縄文」が見られる。136は、時期は必ずしも明確でないが、波状口縁部下に屈曲した部分のあるもので、押引き状の凹線が引かれている。図37右下の打製石斧は緑泥質砂岩の小形のもので、縄文時代前期に属するものかもしれない。図38—185は砂岩製の横刃形石器であるが、縄文時代、弥生時代の別はわからない。石器としてはそのほかに、図38の打製石斧、磨製石斧などが出でているが、いずれも表面採集などによるものである。図33—187、45は鉄製品で、釘状のものである。同じく286は砥石の残片で、第2号周溝墓と第1号溝状遺構間より出土している。

尚、発掘区西端の一ヵ所より、図36—347に示した弥生土器が一括して出土したが、これは戦前の開田時に出土したものまとめ埋納したもので、図33—140+347の紡錘車のように、3号住居址の破片と接合したものであり、恐らく第1号・3号住居址付近を削平した際の遺物であろうと思われる。（赤羽）

台帳No.	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合	同一個体	時代・時期	備考
271	36		弥生土器	甕形土器	口縁部				弥生	
274	32	12	縄文土器	深鉢形土器	胴部				縄文 前期	
277	36		弥生土器	甕形土器	〃				弥生	
278	32	12・13	縄文土器	深鉢形土器	〃				縄文 前期	
279	32	12	〃	〃	〃				〃 〃	
280	32	12	〃	〃	〃				〃 〃	
282	33	14	石器	鎌	(欠損)	?			〃	
283	32	12	縄文土器	深鉢形土器	胴部				〃 前期	
284	32	12	〃	〃	〃			223・262 267	〃 〃	
296	36	?	弥生土器	甕形土器	底部				弥生	
297		18	〃	〃	口縁部				〃	
300			縄文土器	深鉢形土器	胴部				縄文 前期	
306-1	36	18	弥生土器	甕形土器	〃				弥生	
306-2			石器			緑泥質砂岩			縄文 前期	

表・8 第1号溝状遺構出土遺物

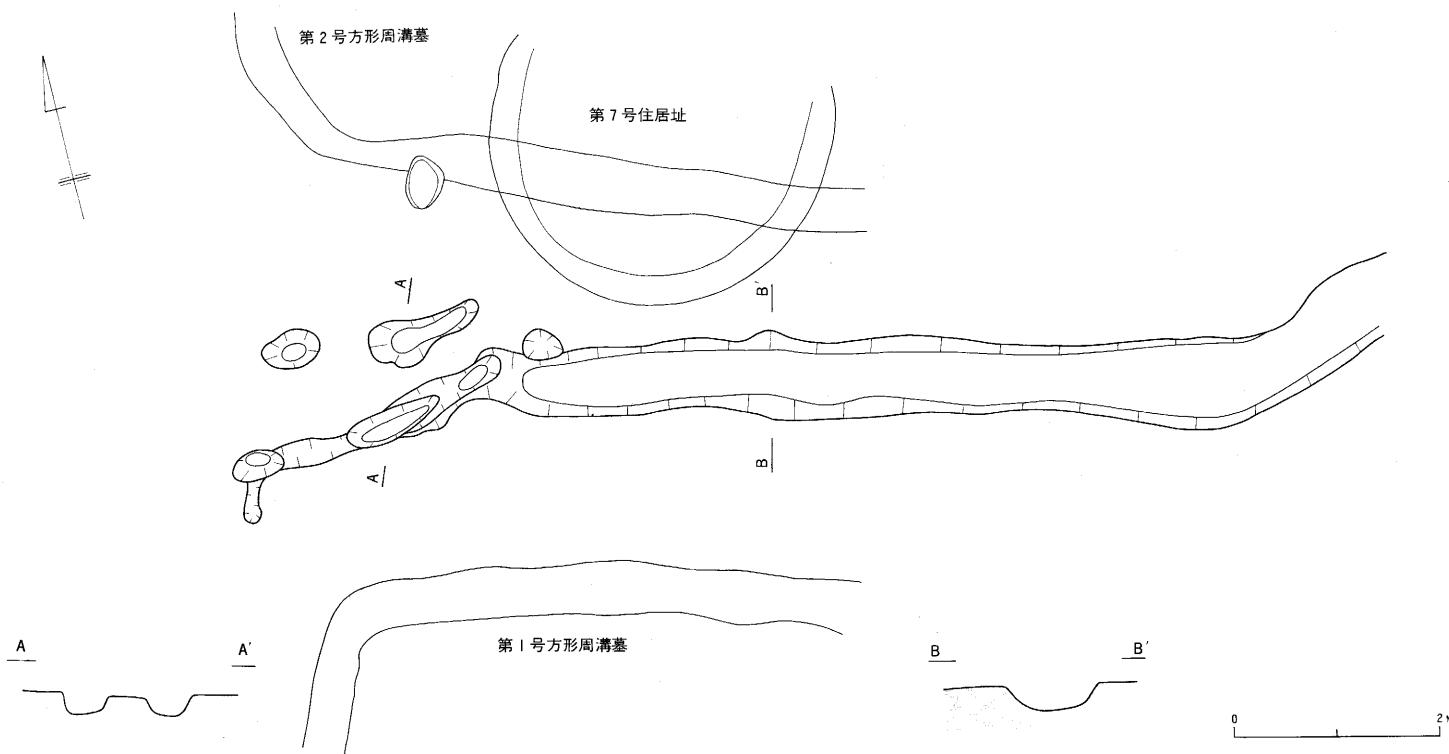


図30 第1号溝状遺構 (1:80)

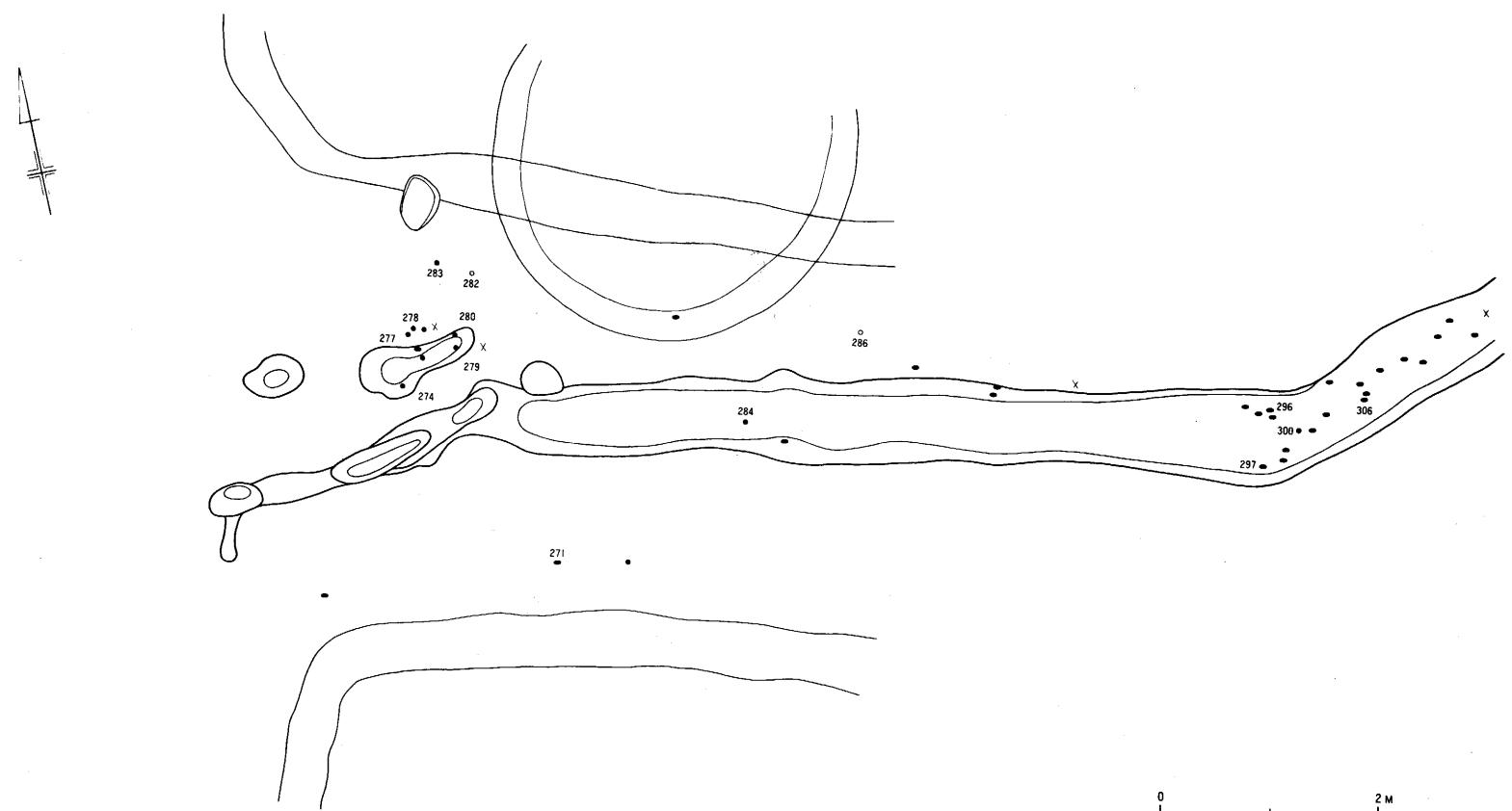


図31 第1号溝状遺構の遺物分布 (1:80)
(●縄文前期 ●弥生 ○石器 ×陶器)

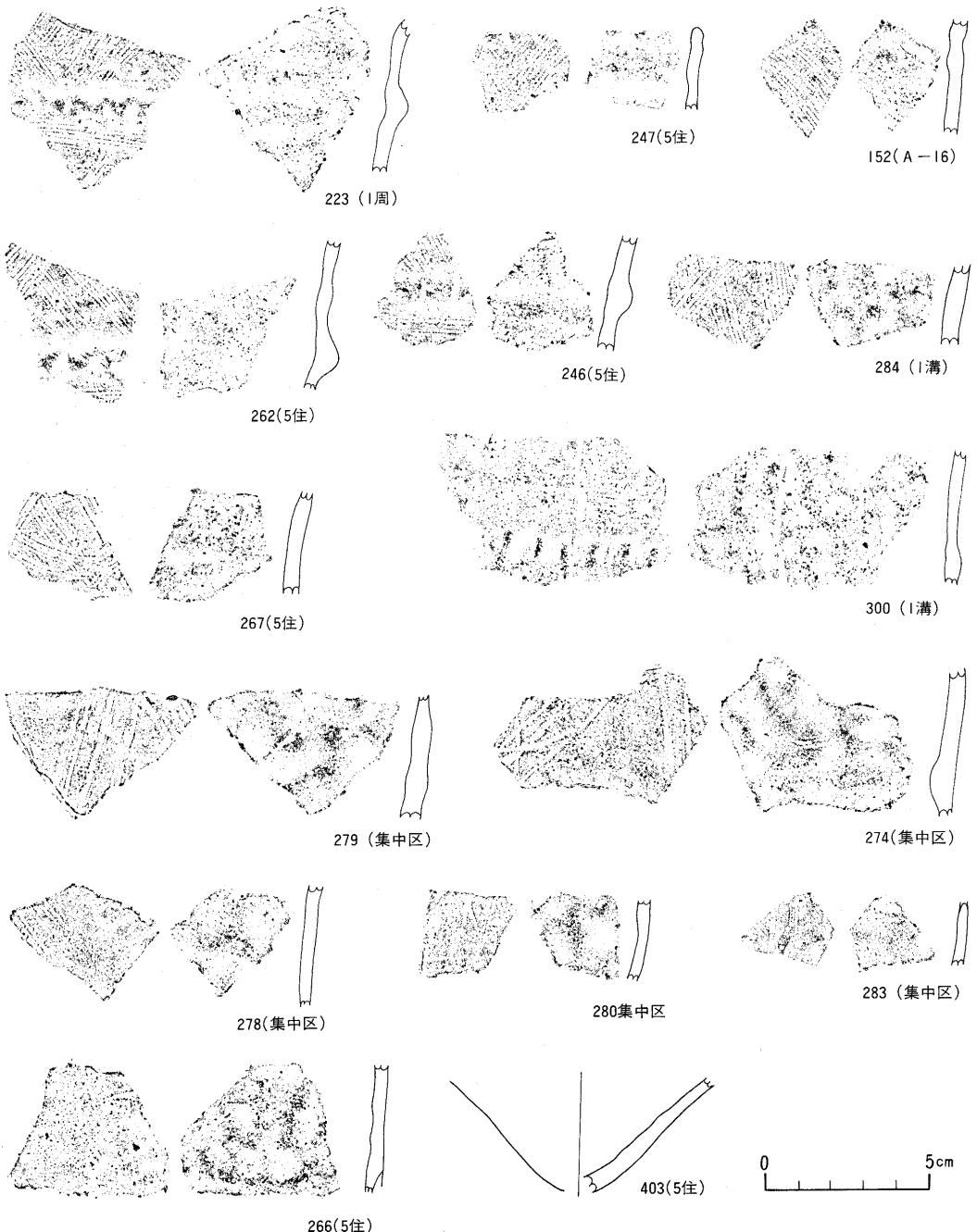


図32 繩文時代前期の土器 (1:2)

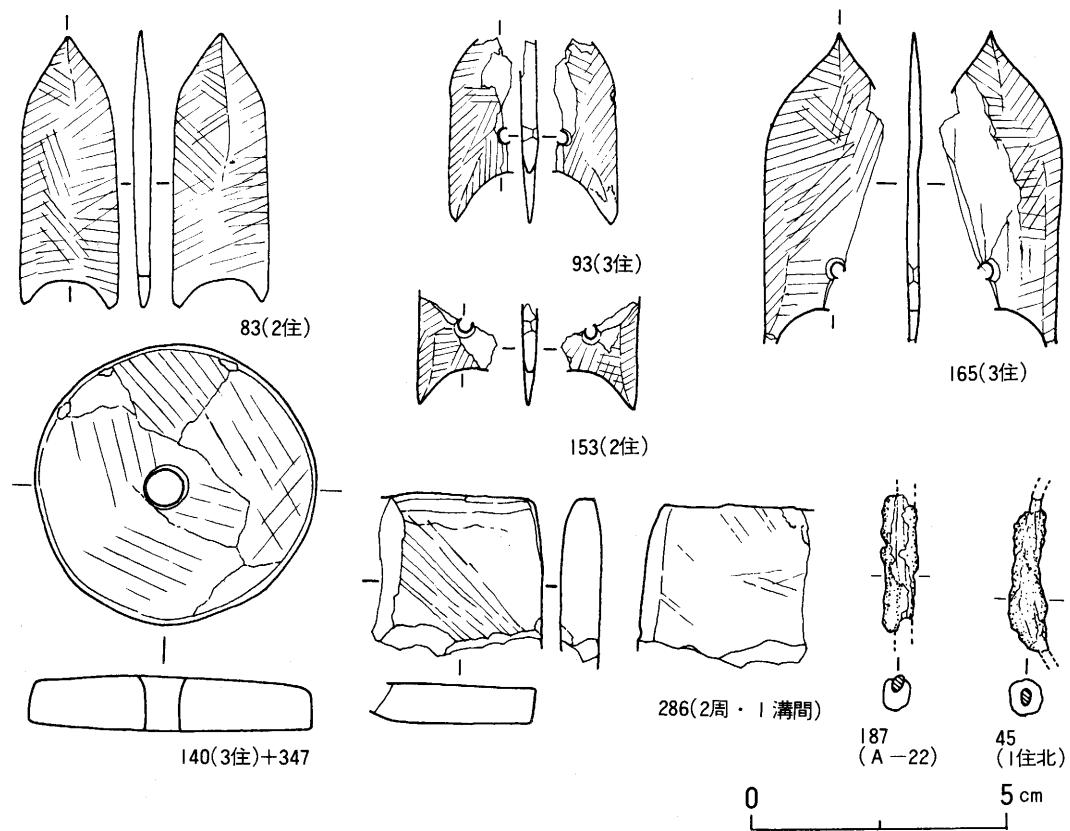
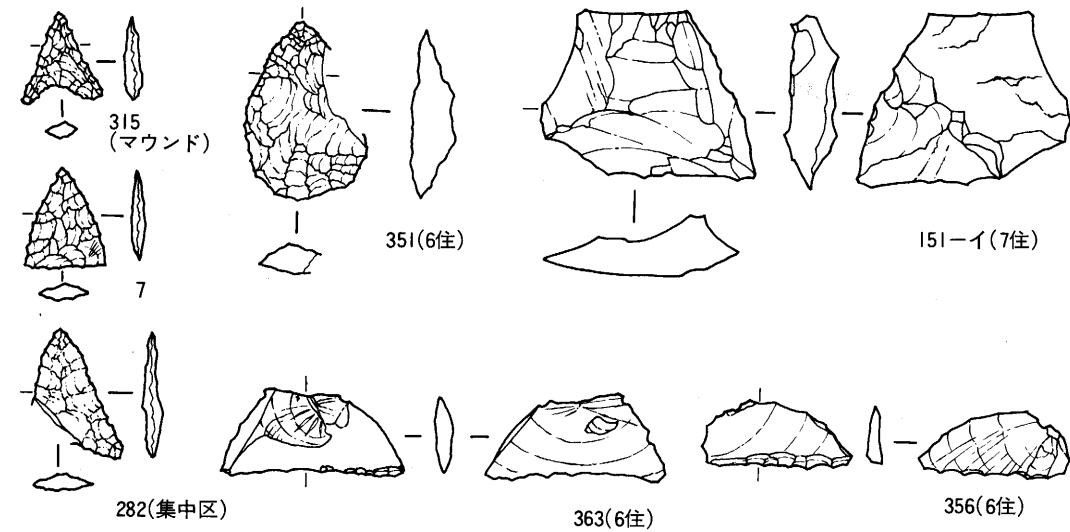


図33 各期の石器・鉄製品(2:3)

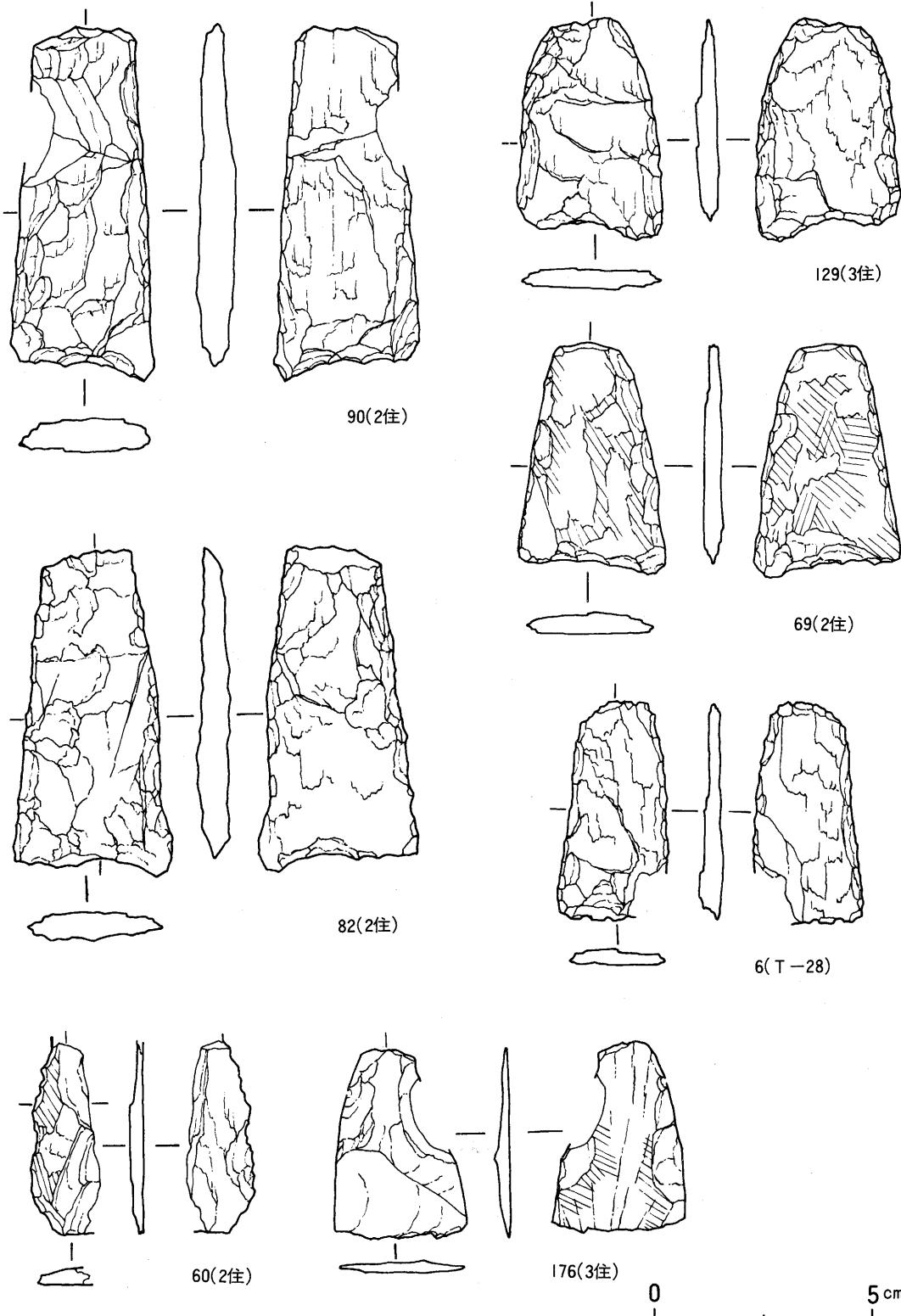


図34 製作途中の磨製石錫 (2:3)

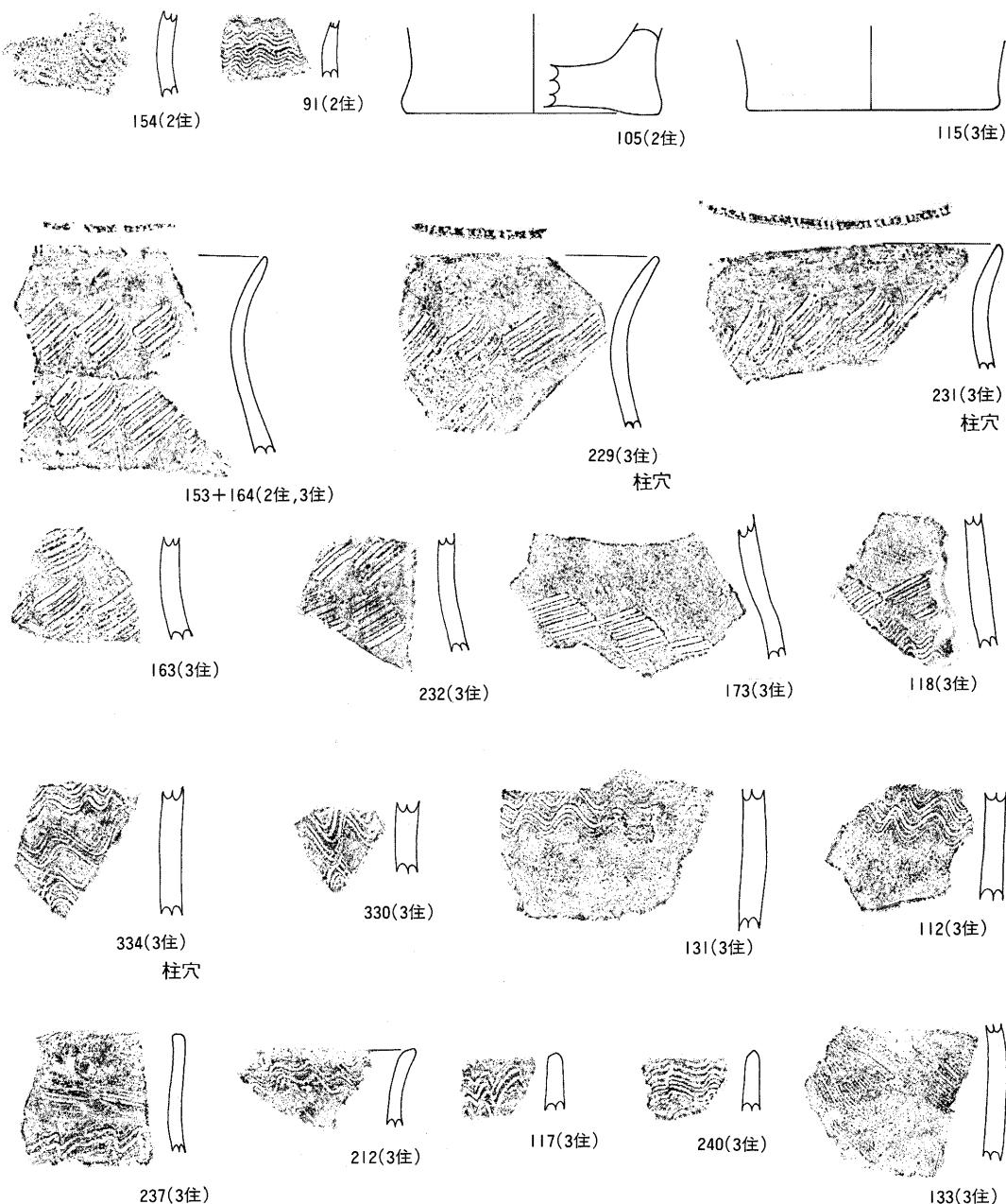


図35 第2号・3号住居址出土土器 (1:2)

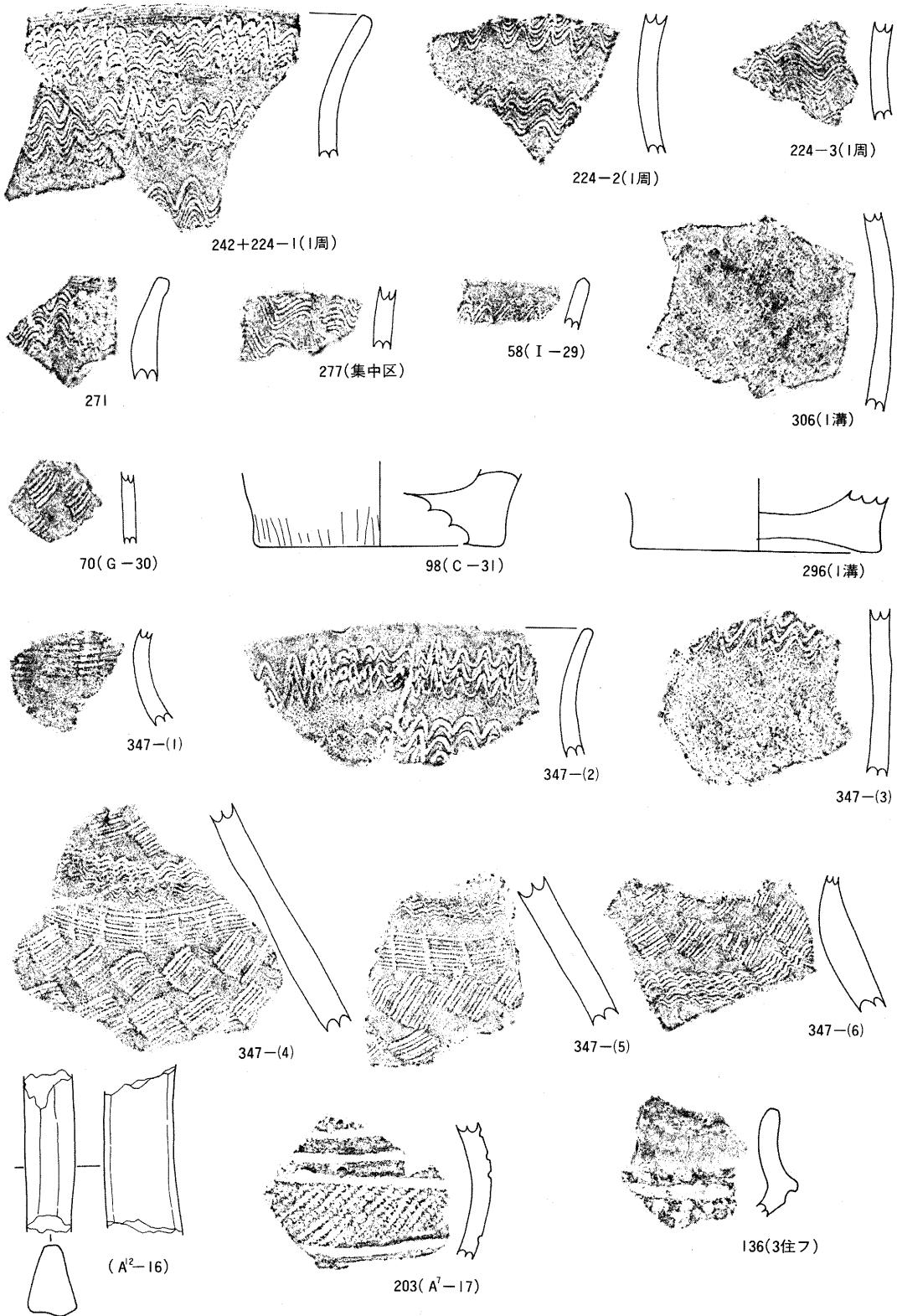


図36 周溝墓その他出土の弥生土器ほか(1:2)

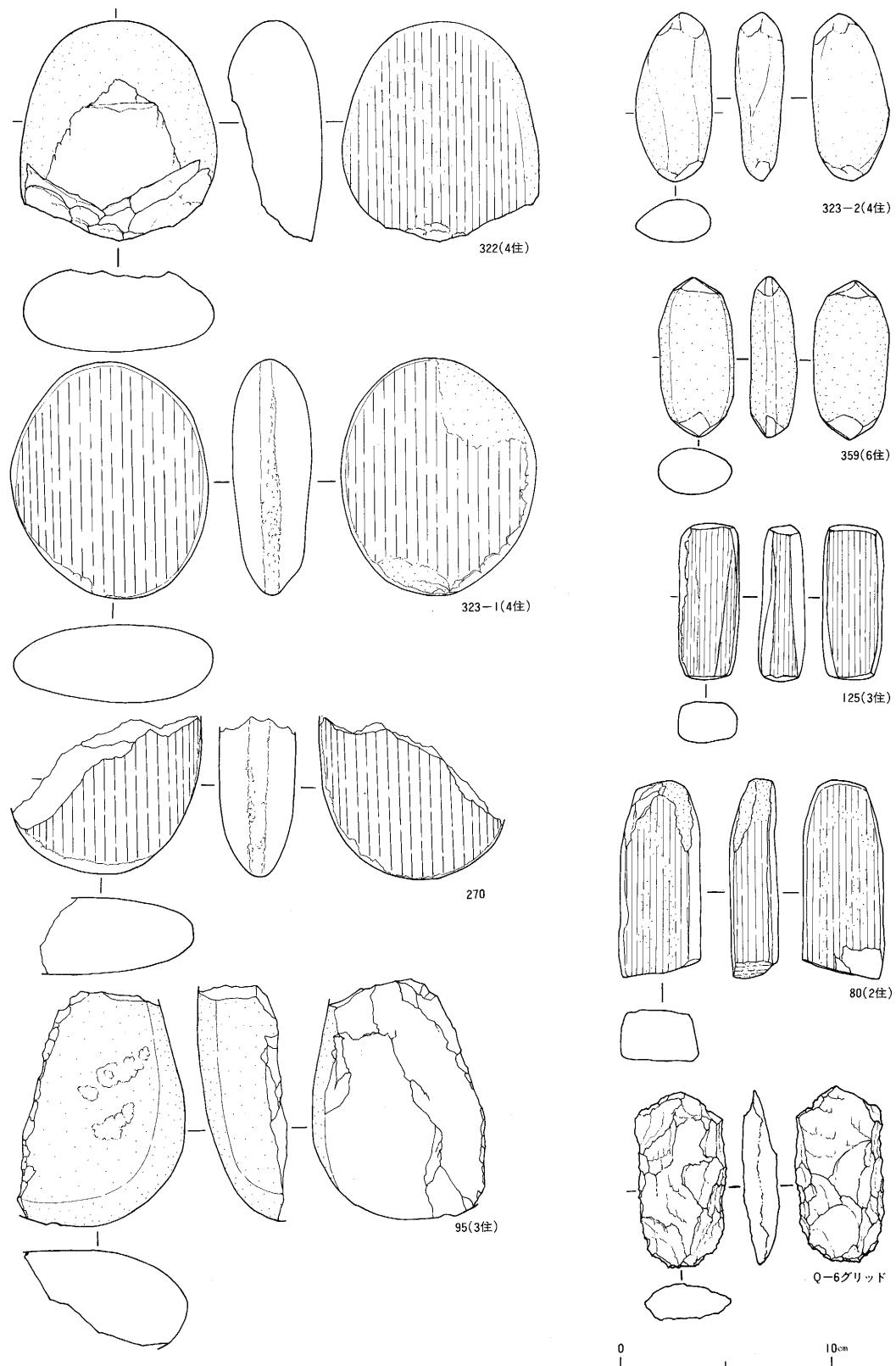


図37 各期の石器(I) (1 : 3)

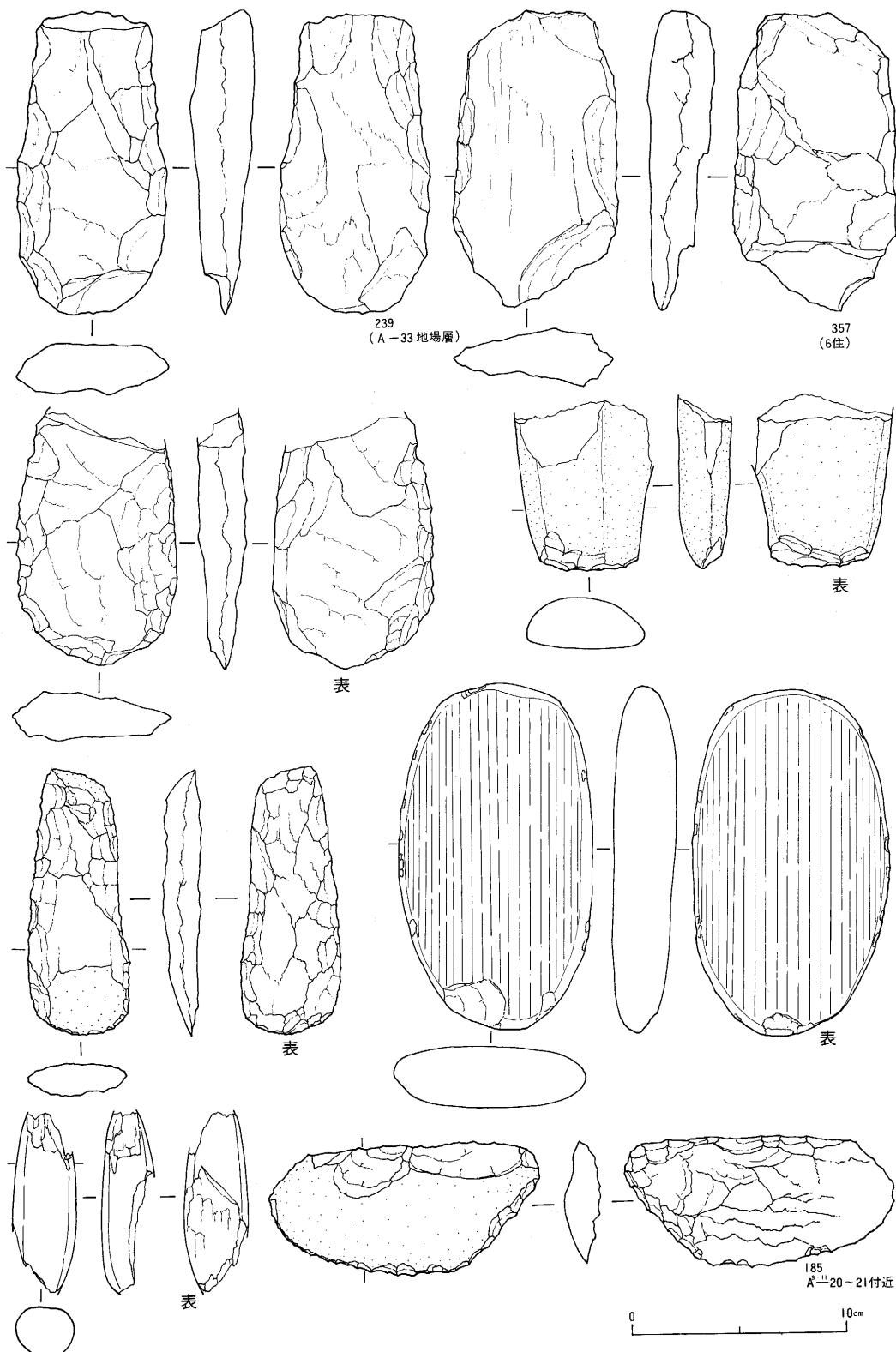


図38 各期の石器(2) (1 : 3)

所 見

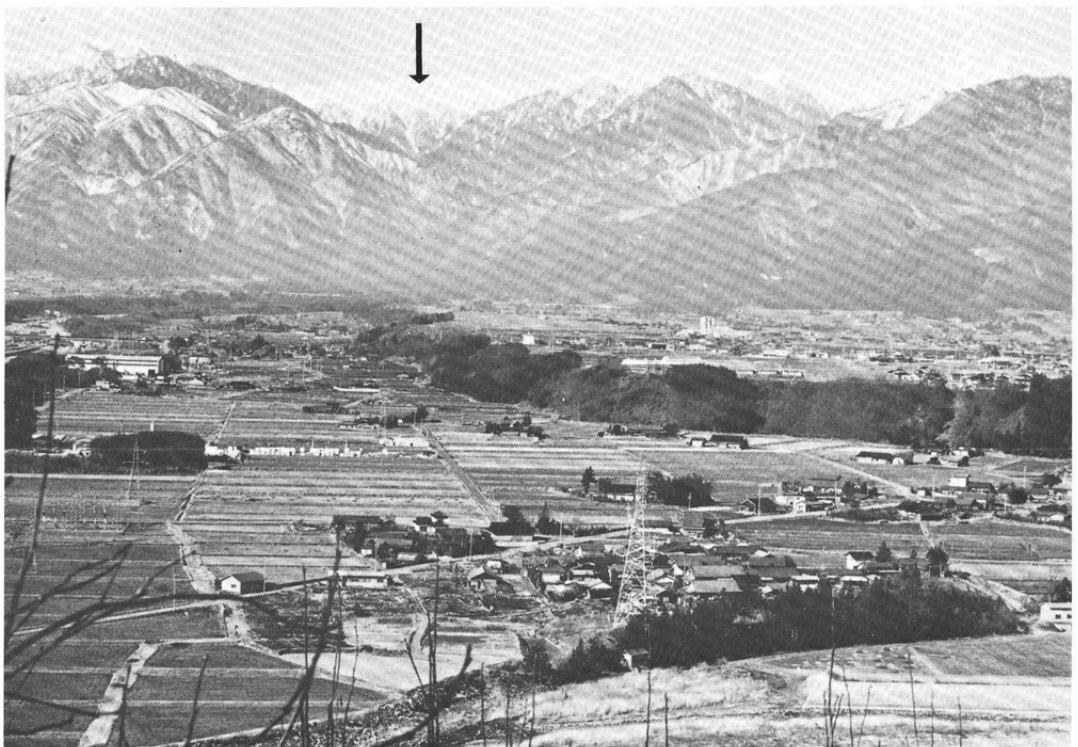
今回の調査結果については、以上述べてきたとおりである。検出された遺構は、縄文時代前期前半の住居址、同時期と考えられるロームマウンド。弥生式後期の住居址、方形周溝墓、溝状遺構等を調査した。

1. 駒ヶ原南遺跡の位置。長野県上伊那郡宮田村駒ヶ原に所在する。地理的には、諏訪湖に源を発する天竜川の右岸段丘を、木曾山脈駒ヶ岳より流れいする太田切川の左岸合流地点の段丘上に立地する。
2. 宮田村の遺跡。こゝ数年の間、県営は場整備事業、中央高速自動車道、住宅団地造成工事等が次から次へと行なわれるにおよび、遺跡の調査も併行して実施され、宮田村の遺跡の性格も次第に明らかになってきた。その主な遺跡は、縄文早期表裏縄文の住居址が発見された向山遺跡。中央道調査で発見された縄文早期後半の住居址が発見された元宮神社東遺跡。は場整備工事関係では、下の段遺跡、松戸遺跡からは東海系の柏畑式、入海式、天神山式等と関東系の鴨ヶ島台式、茅山式などの縄文早期末の遺物が多く出土した。このことは、縄文前期前半の中越遺跡の研究に大きなプラスとなることと思う。
3. 駒ヶ原南遺跡の縄文時代の集落は、中越遺跡における集落を構成した一集団がある時期、南に2キロメートル離たった駒ヶ原南遺跡に移動し、そして再び集落を営み、またそこをすべて、再度中越へ戻るといった場合が考えられる遺跡である。
4. 弥生時代後期の遺跡。は場整備で発見された姫宮遺跡からは、住居址30軒、土塙群、ロームマウンド、水田の木柵等が発見された遺跡で、現在上伊那郡で弥生時代後期の遺跡としては大きい方の遺跡である。出土遺物からして、座光寺原式に類似する。そのほか、向山遺跡も座光寺原式の住居址が発見されている。また、天竜川をへだてて駒ヶ根市東伊那遺跡からは、駒ヶ原南遺跡と同時期の遺物を出土する遺跡があり、集落を構成した集団の交流も考えられる資料となろう。
5. 本遺跡における弥生時代の集落は、発見されている3軒の住居址より北西の方向にあったと考えられる。残念なことに旧耕地整理工事の折ほとんど破壊され、一部がかろうじて残った形となった集落址である。発見された住居址は伊那谷後期前半の住居と何等異なることはないが、隣接する姫宮遺跡の同時期の住居址には、ほとんど炉に埋葬が認められたが、本遺跡の住居址はすべて地床炉であった点など今後問題となろう。
6. 柱穴について、本遺跡発見の住居址の柱穴を精査してみると、円形、楕円形、半割形、平割形に分類することができる。本遺跡では、これらの形状のものが混じっていることが明らかとなった。このことは、上屋構造に直接関係があることはいうまでもない。したがって上屋の造形は、平面に大きく規制されることを余儀なくされる。そしてその関係が上屋構造推定の手掛を与えることになる。こうした意味から、現在住居址の柱穴の掘方に問題がある。
今日伊那、諏訪地方に発見されている弥生後期の柱穴址をそのまゝ、信用して良いものかとまどうものである。姫宮遺跡の調査以来柱穴址について、いささか注目してきたが、このなかでいくつか類別することが可能になってきた。円形と楕円形の組合せ。楕円形のみのもの。楕円形と半割との組合せ。楕円と平割の組合せ。平割のみの組合せが存在することが明らかとなった。これら柱の形状が上屋構造に如何に関係するかは明らかにできないが、とにかくもっと柱穴に注意をはらっていく必要を痛切に感ずるものである。
7. 上伊那の弥生時代後期の遺跡の最近の調査を見ると、辰野町五反田11軒。同町内域58軒。箕輪町、北域21軒。同町猿楽6軒、南箕輪村北高根A 5軒、高根1軒。伊那市、堂垣外2軒、砂場4軒、東方1軒、中村1軒、宮田村、姫宮30軒、駒ヶ原南3軒。向山1軒。駒ヶ根市、舟山1軒、東伊那7軒。飯島町、町谷2軒。高尾1軒、合計155軒を調査した。今後これらの遺跡総合の視点にたって考究したいと考えている。
8. 方形周溝墓。天竜川水系から発見されている方形周溝墓は、弥生時代後期前では、下伊那、飯田、権現堂前、同伊賀良、滝沢井尻。中では、市田、角田原1.2。鼎町、天伯A。山本、石子原1.2.3。座光寺原式。後では、喬木帰牛原南、1.2.3.4.5。神稲、田村原1.3。中島式の貴物を出土する。東海系と中島式が出土するものとしては、松尾、清水1.2。飯田さつみ。喬木帰牛原1.2。市田、出原西部、大島。的場1.2。松尾清水3.4.5.6.8.9.10。田村原2等。上伊那では、辰野町樋口五反田1.2。後期前半、宮田村、駒ヶ原南1.2。伊那市西春近小出南原遺跡1。後期後半。
諏訪では、諏訪真志野本城1.2。後期後半。本城1.2号は古墳時代前期。諏訪岡谷添、平山、弥生後期。塩尻焼町、弥生後期等である。天竜川水系の方形周溝墓は弥生時代後期前・中・後と古墳時代前後にわたって作られている。

天竜川水系に分布する方形周溝墓も40余墓を数えることになり、今後発生、終末の問題をはじめ、集落との関係、立地条件、信仰等多くの問題をかかえている。

友 野 良 一

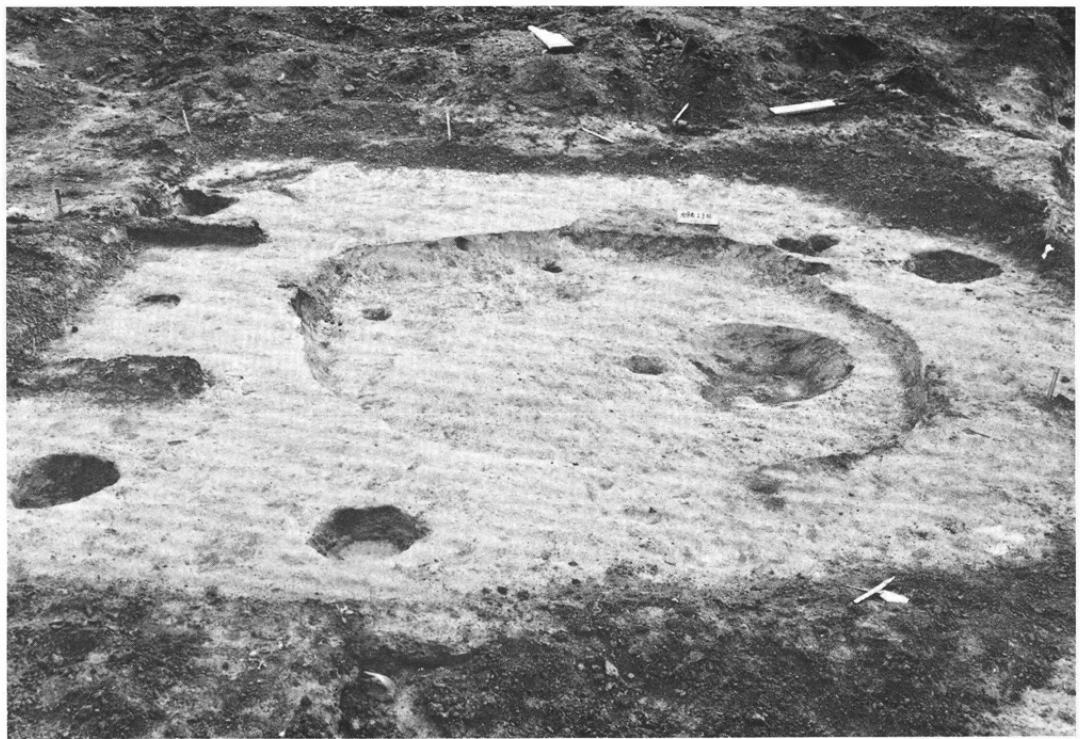
図版



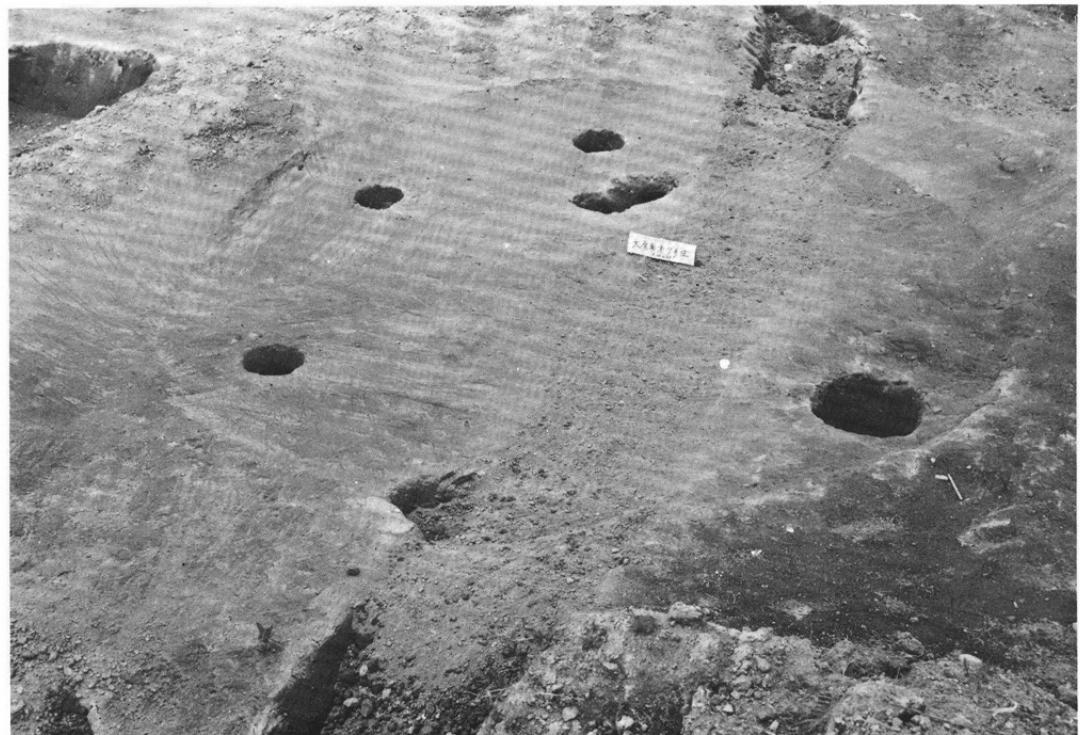
▲ 遺 跡 の 立 地 (段丘上の先端部に遺跡がある)



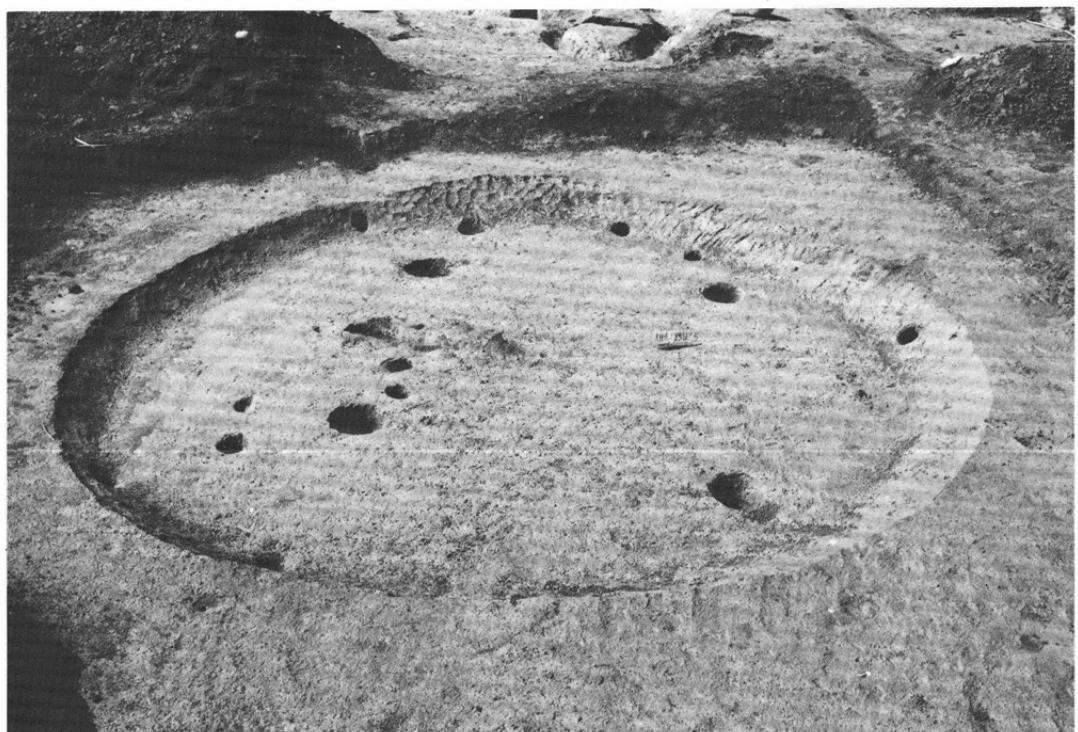
▲ 発 掘 区 の 近 景 (第 1 号～第 3 号住居址付近)



▲ 第 4 号 住 居 址



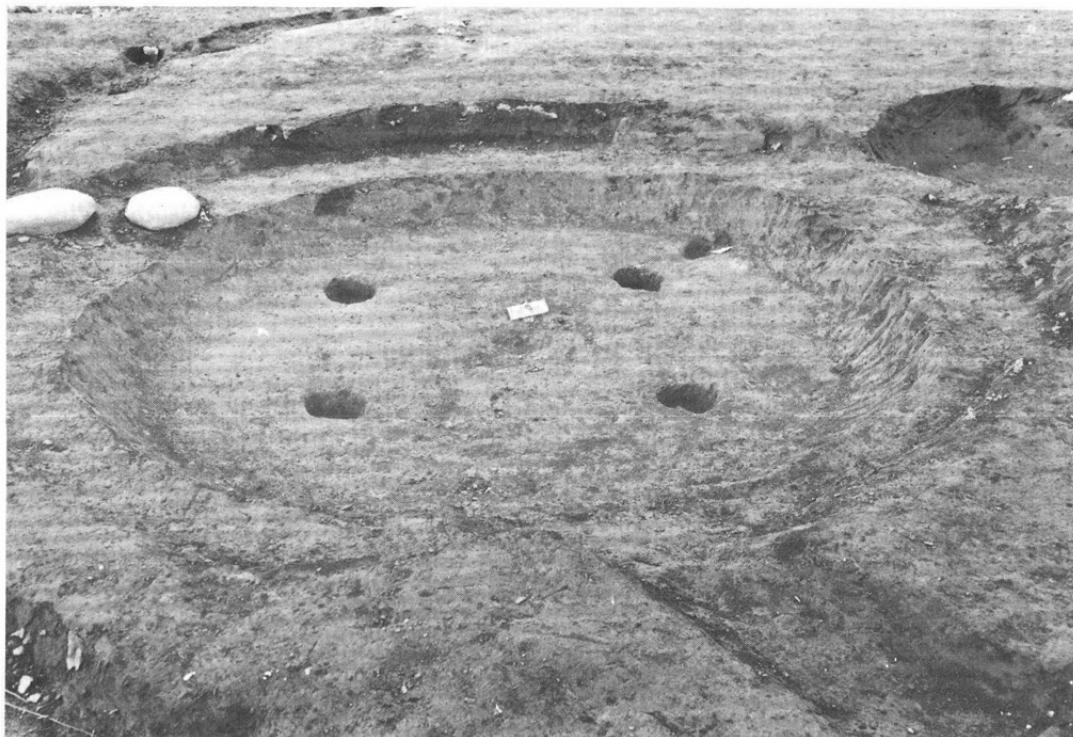
▲ 第 5 号 住 居 址



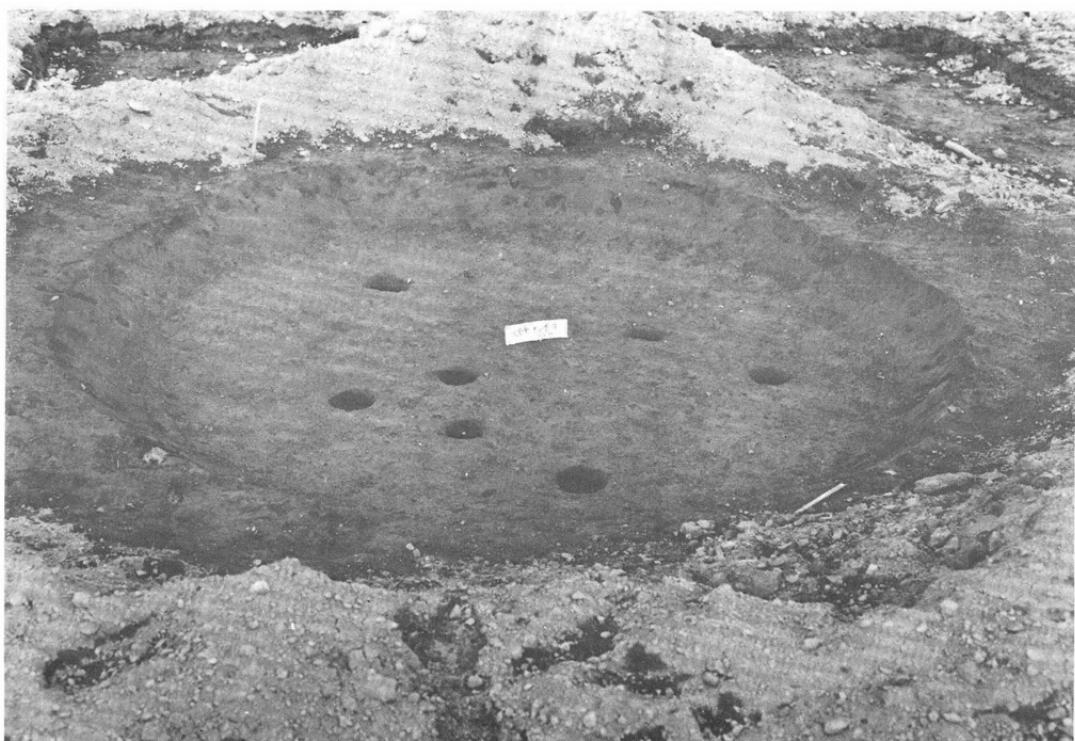
▲ 第 6 号 住 居 址



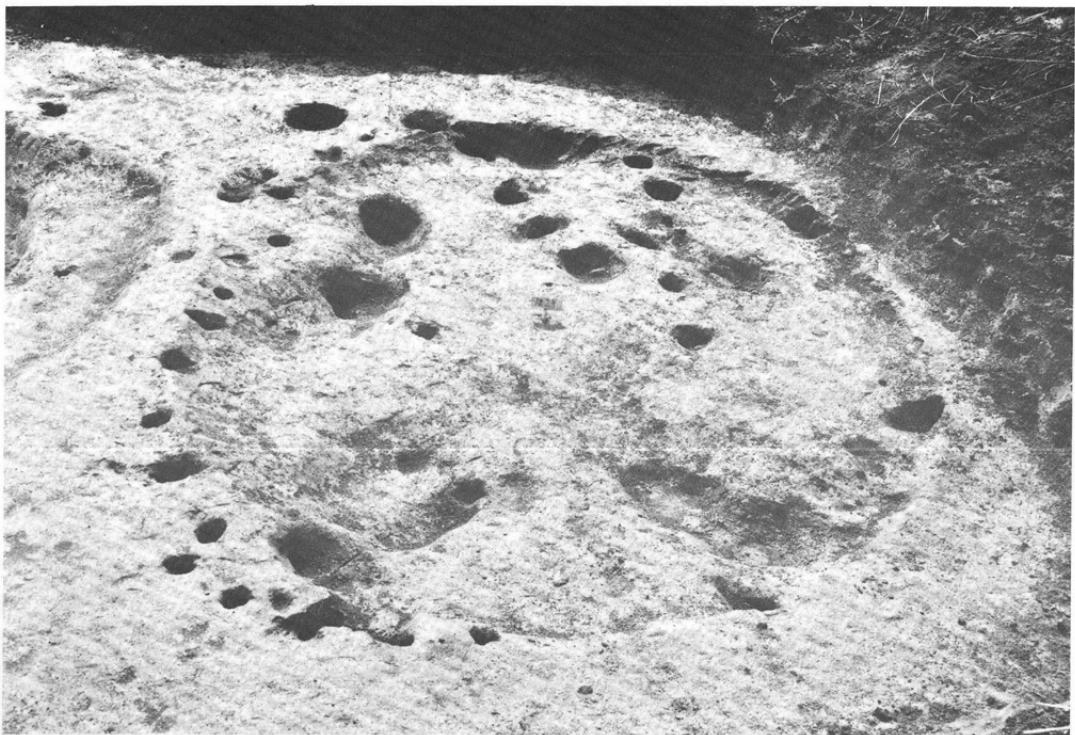
▲ 第 7 号 住 居 址



▲ 第 8 号 住 居 址



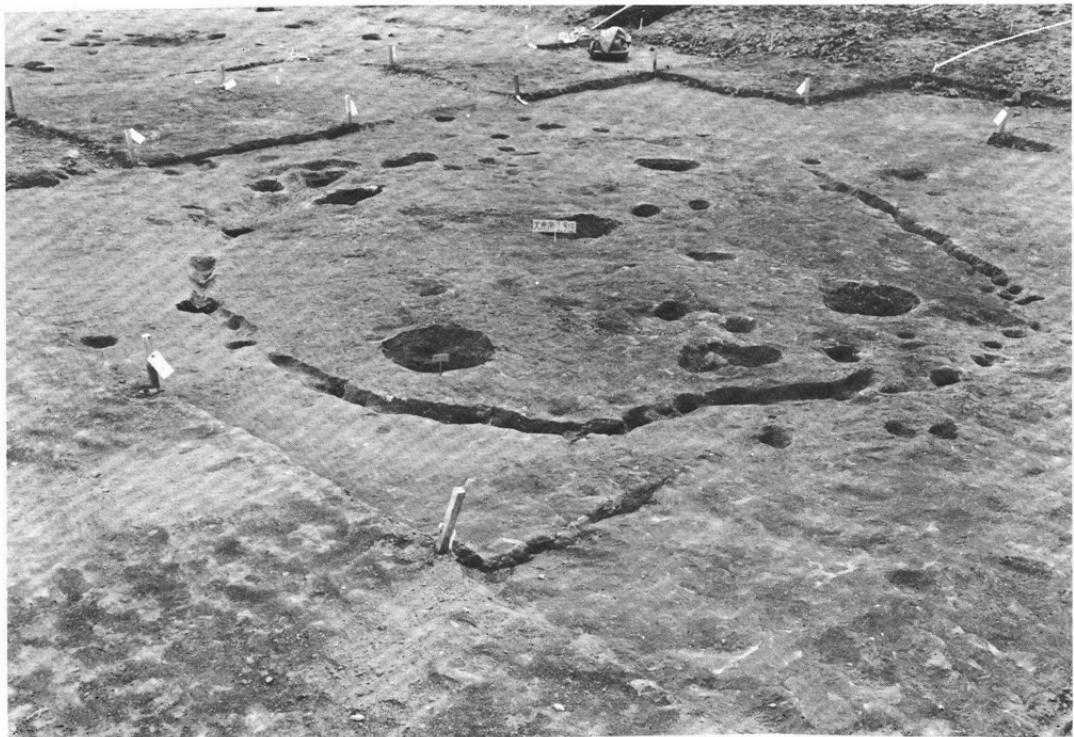
▲ 第 9 号 住 居 址



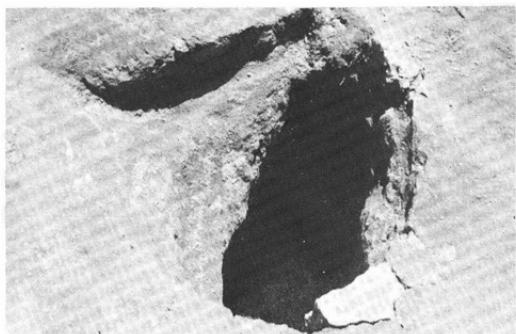
▲ 第10号住居址



▲ 第1号、第2号の各マウンド



▲ 第 1 号住居址



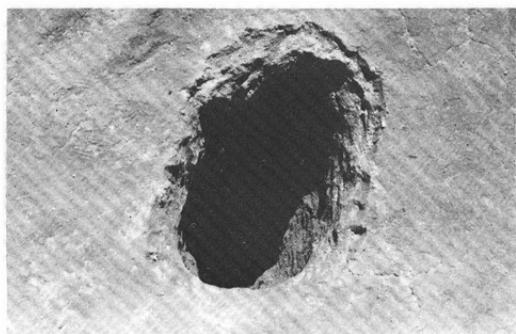
P.1



P.2



P.3



P.4



▲ 第 2 号 住 居 址



P.1



P.2



P.3



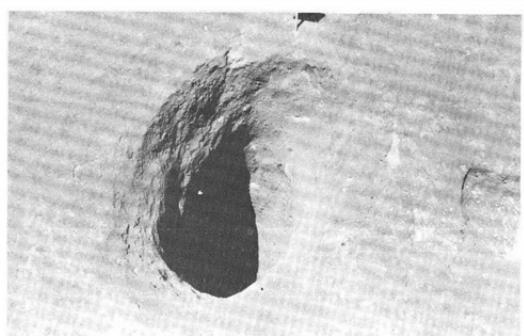
P.4



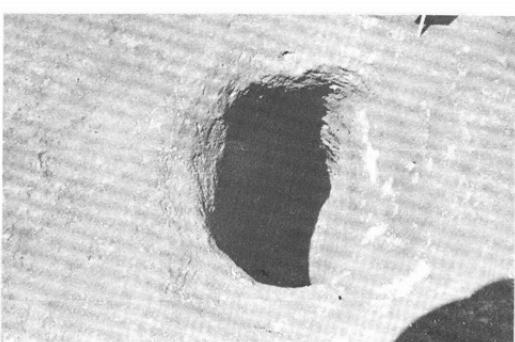
▲ 第3号住居址



P.1



P.2



P.3



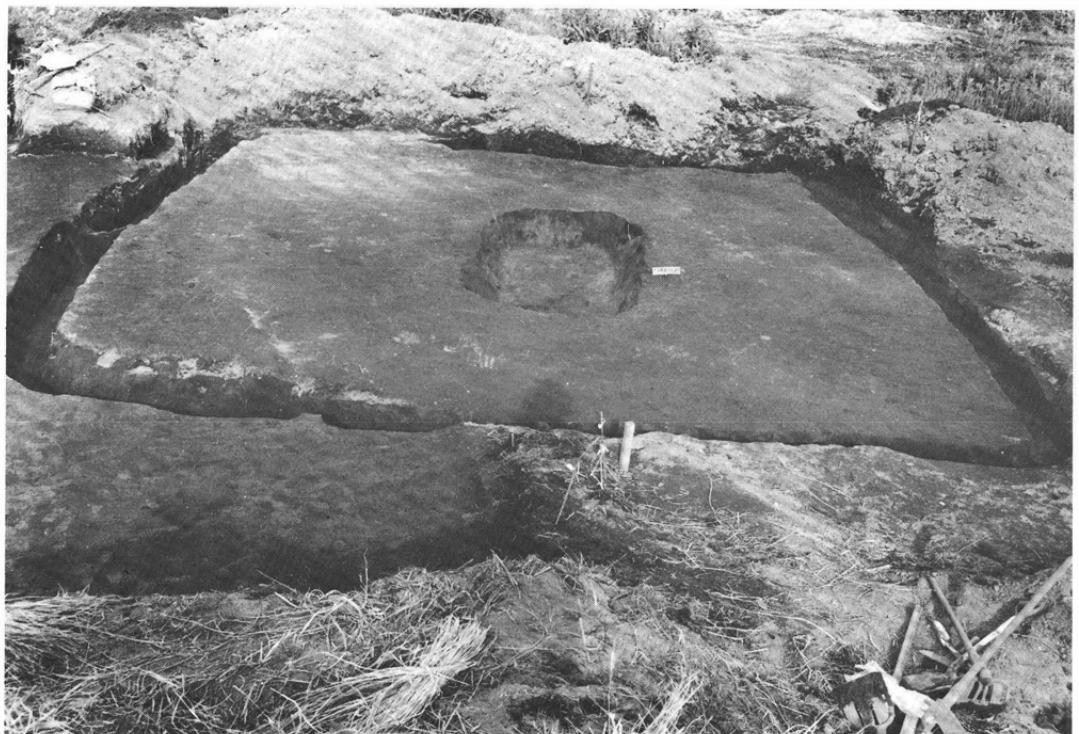
P.4



▲ 発掘区東端の方形周溝墓と縄文時代前期の住居址



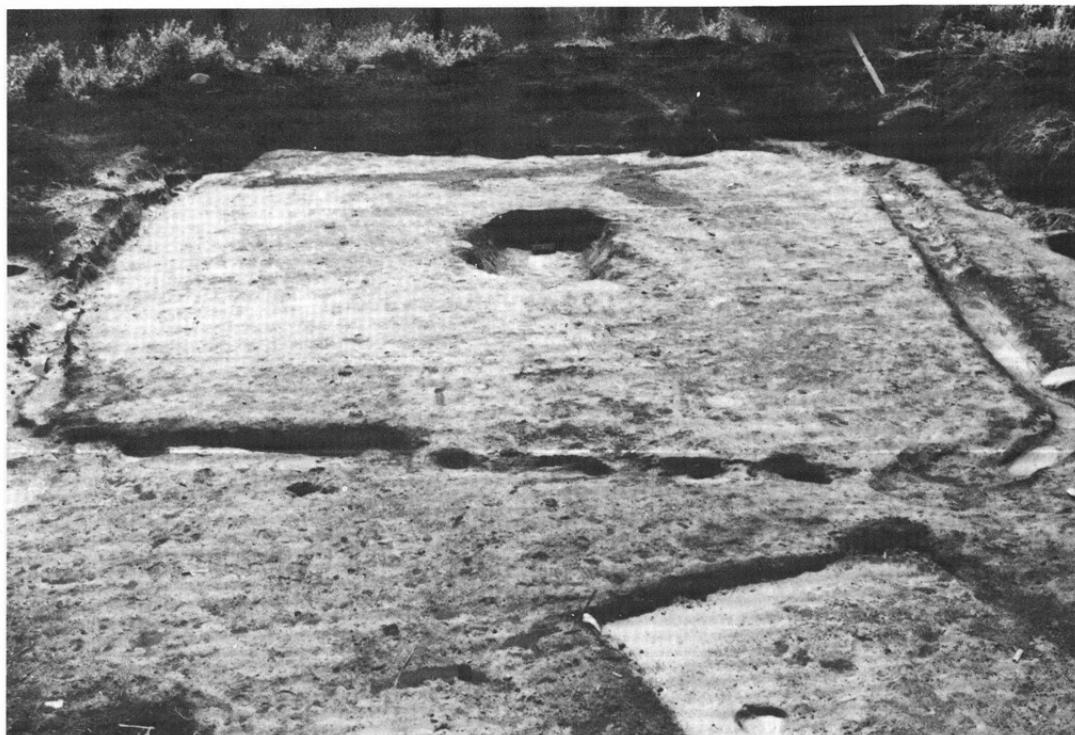
▲ 第1号方形周溝(手前)と第2号方形周溝墓



▲ 第 1 号 方 形 周 溝 墓



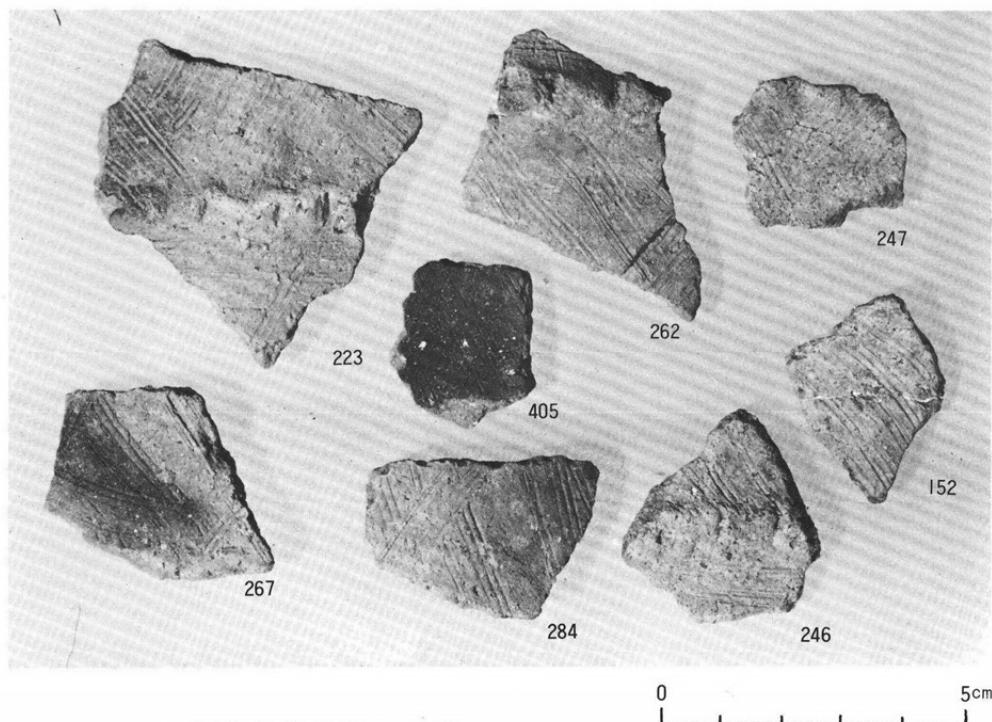
▲ 同 主 体 部



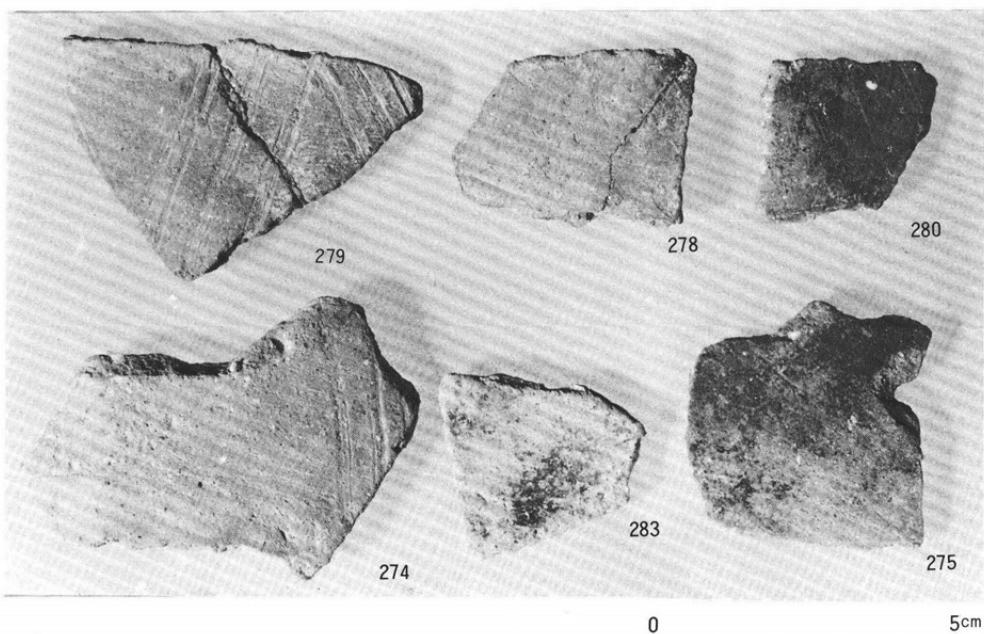
▲ 第 2 号 方 形 周 溝 墓



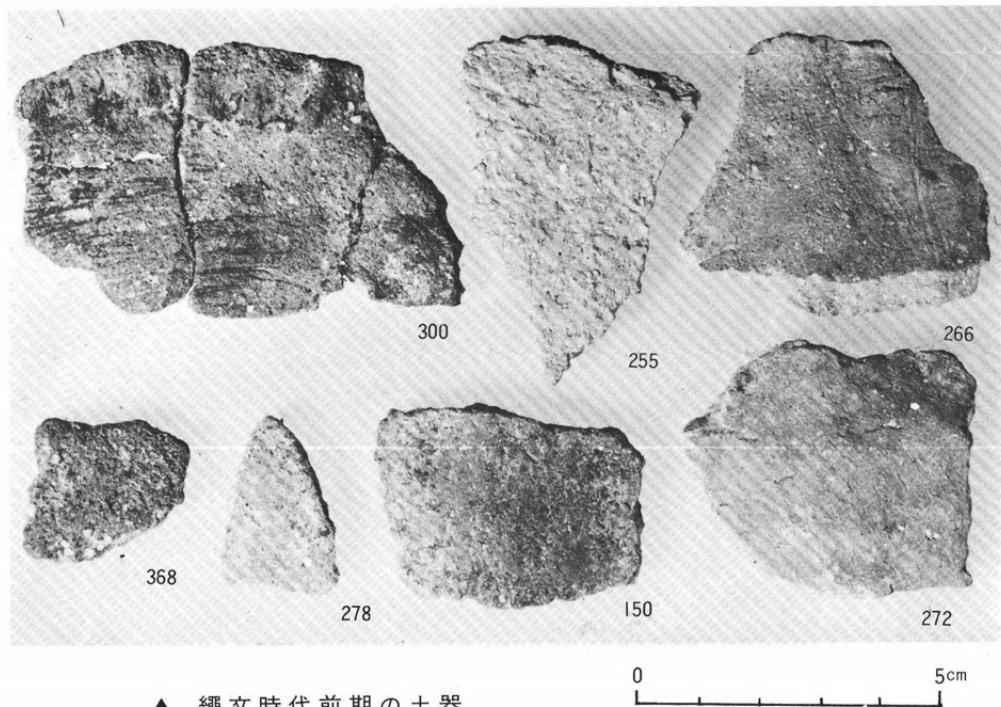
▲ 同 主 体 部



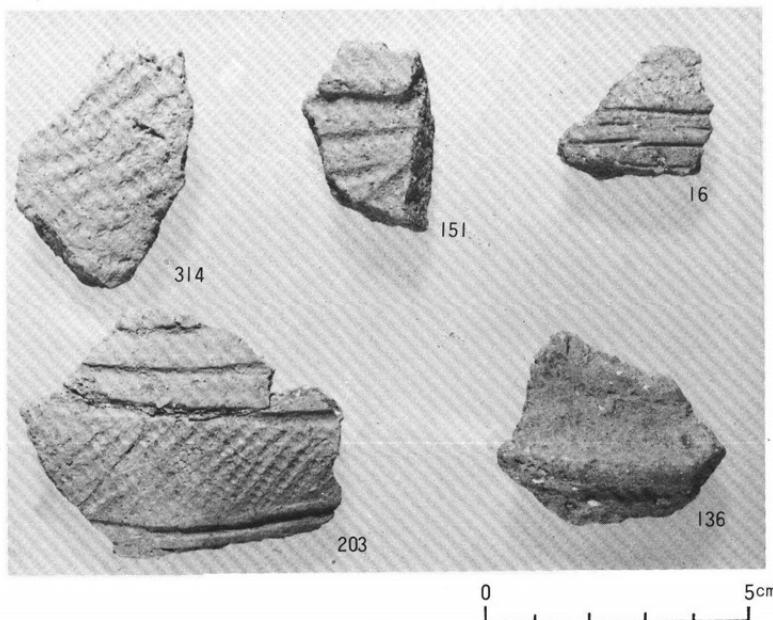
▲ 繩文時代前期の土器



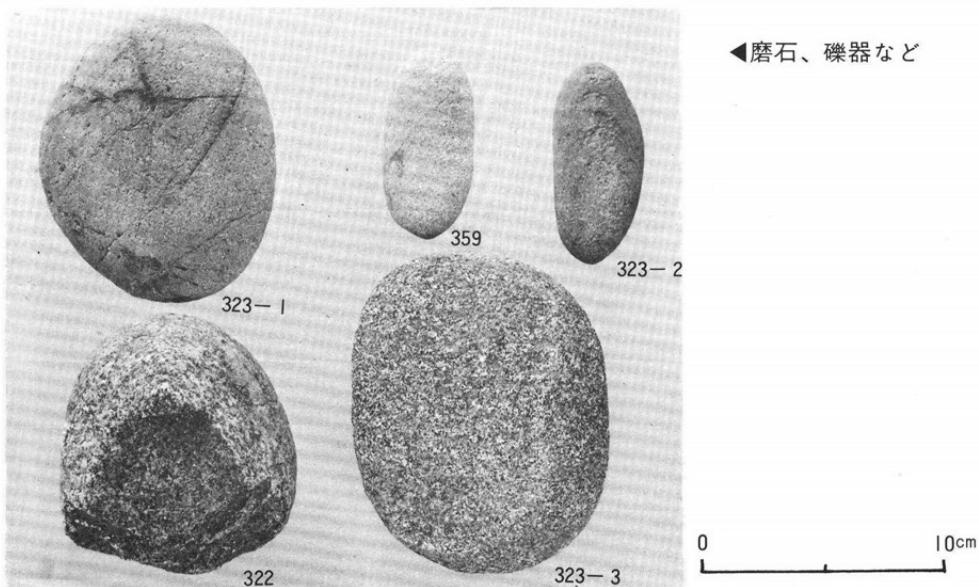
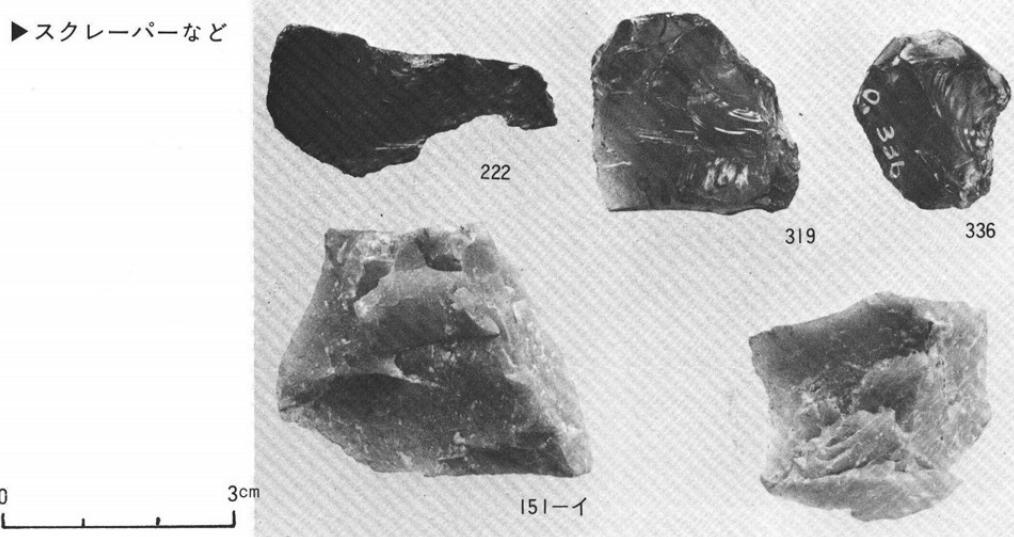
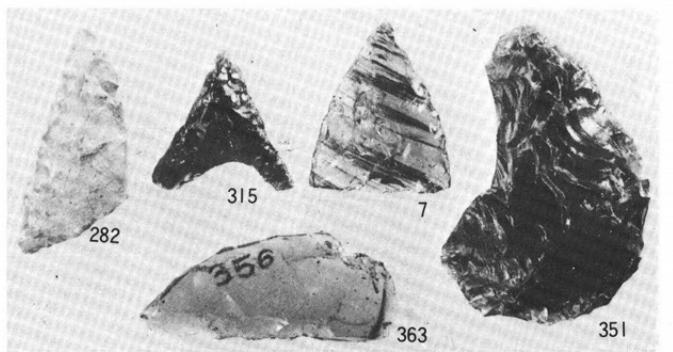
▲ 繩文時代前期の土器

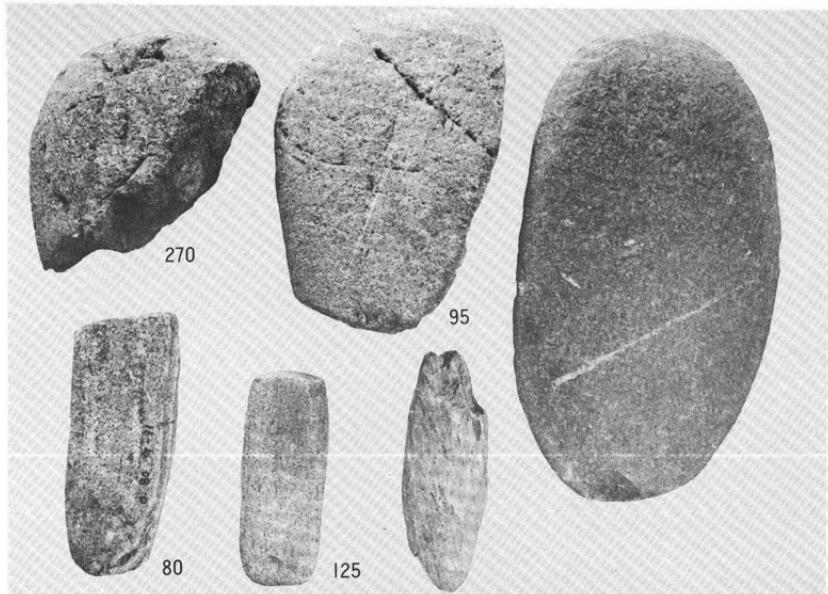


▲ 繩文時代前期の土器



▲ 繩文時代各期の土器

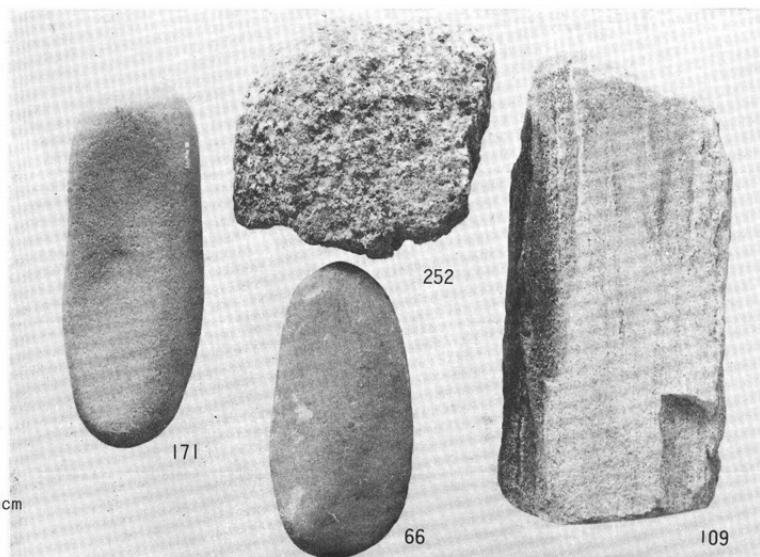




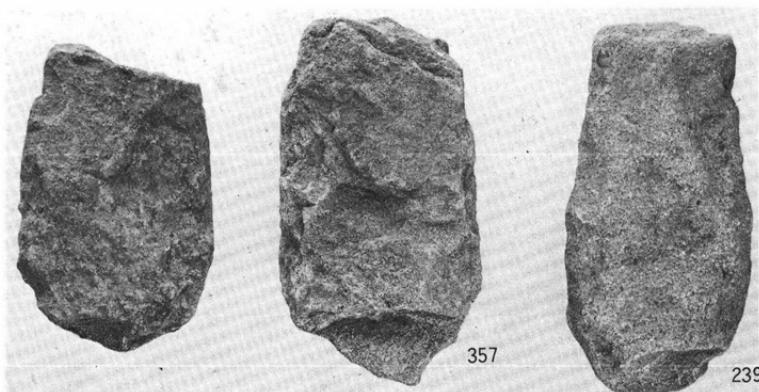
◀磨石、磨製石斧
など

0
—
10cm

►石皿、その他

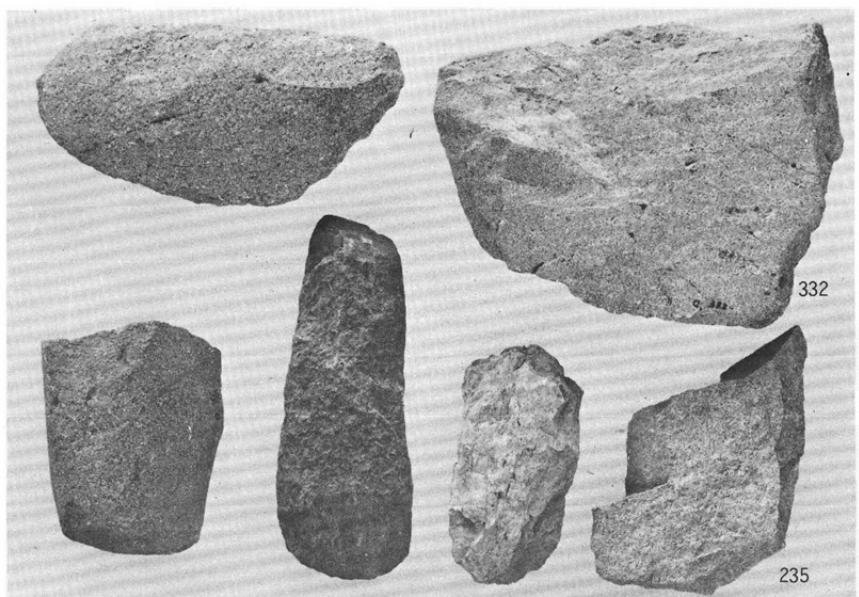


0
—
10cm



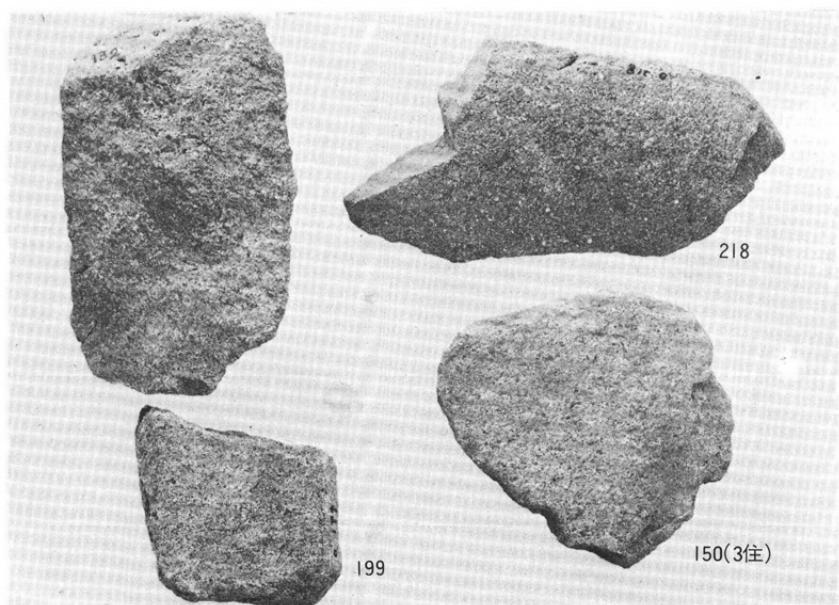
◀打製石斧

0
—
5cm



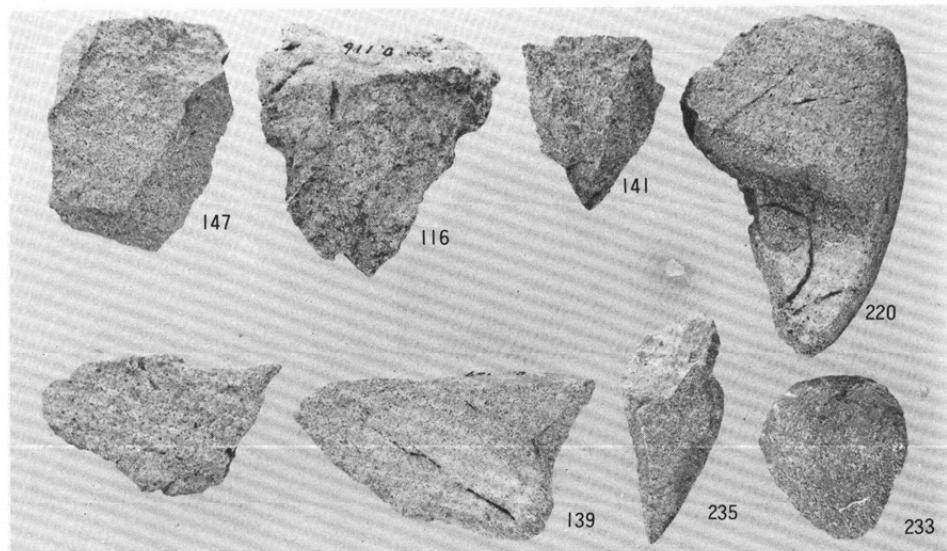
▲打製石斧、横刃形石器、フレイク

0 10cm

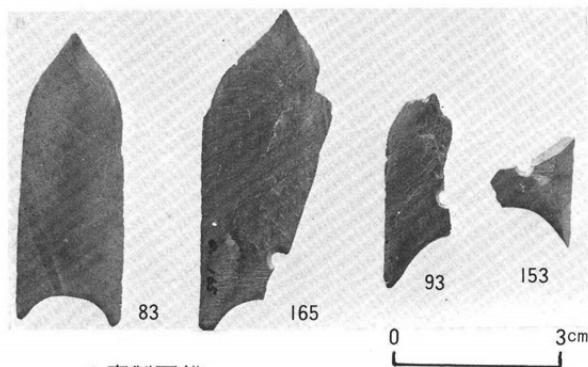


▲ 焼けた砂岩のフレイク

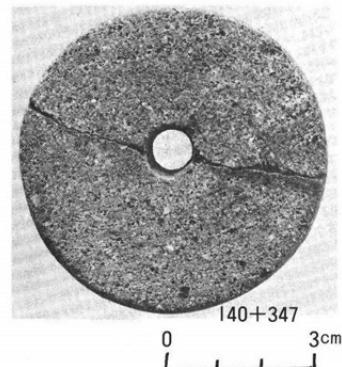
0 5cm



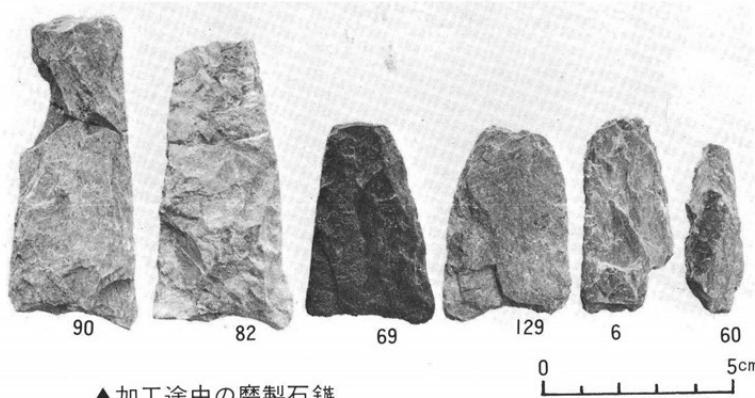
▲砂岩のフレイク



▲磨製石鎌



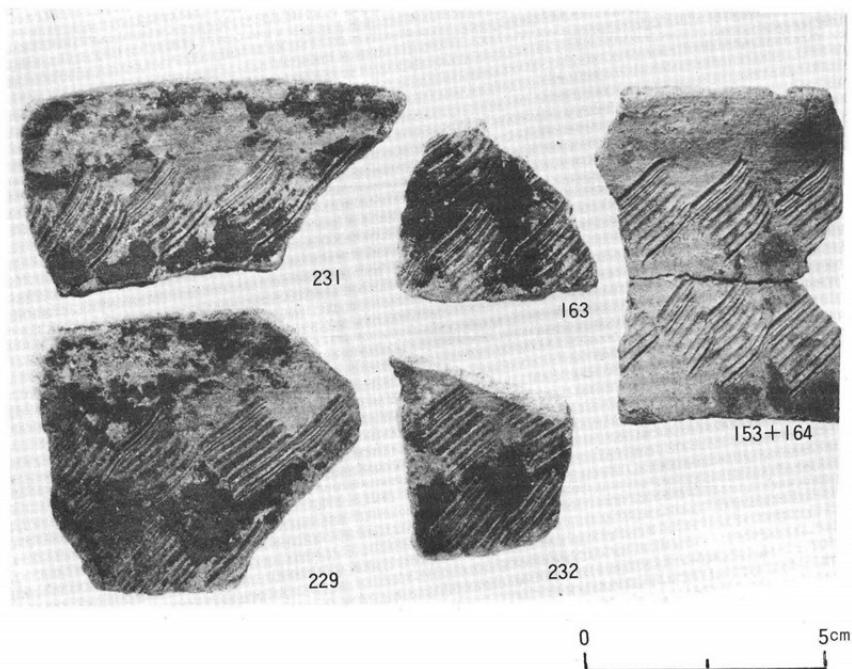
▲石製紡錘車



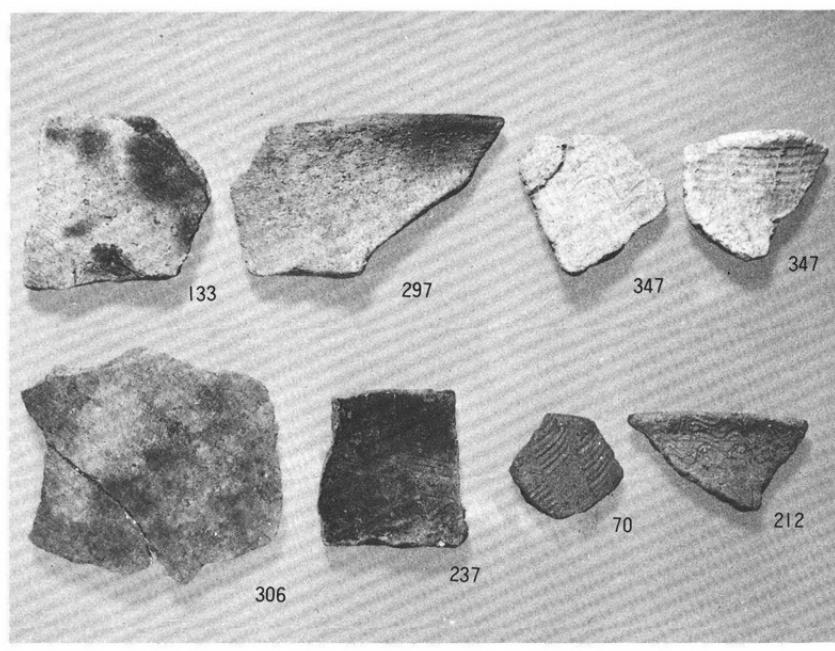
▲加工途中の磨製石鎌



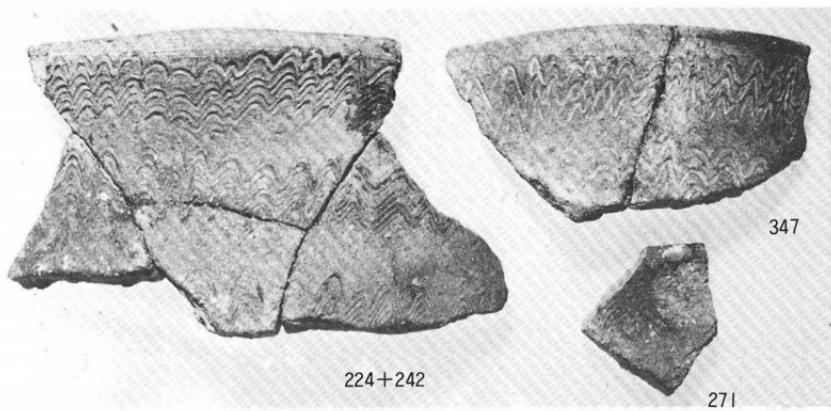
▲砥石



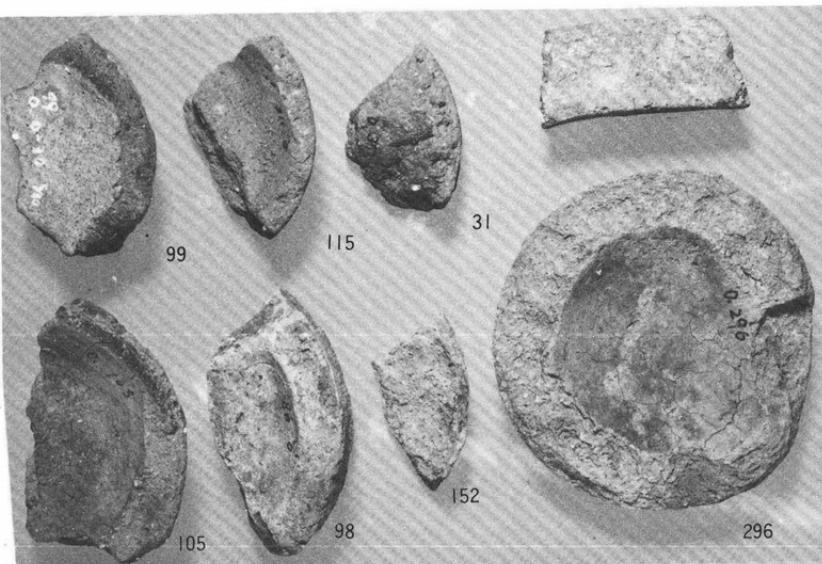
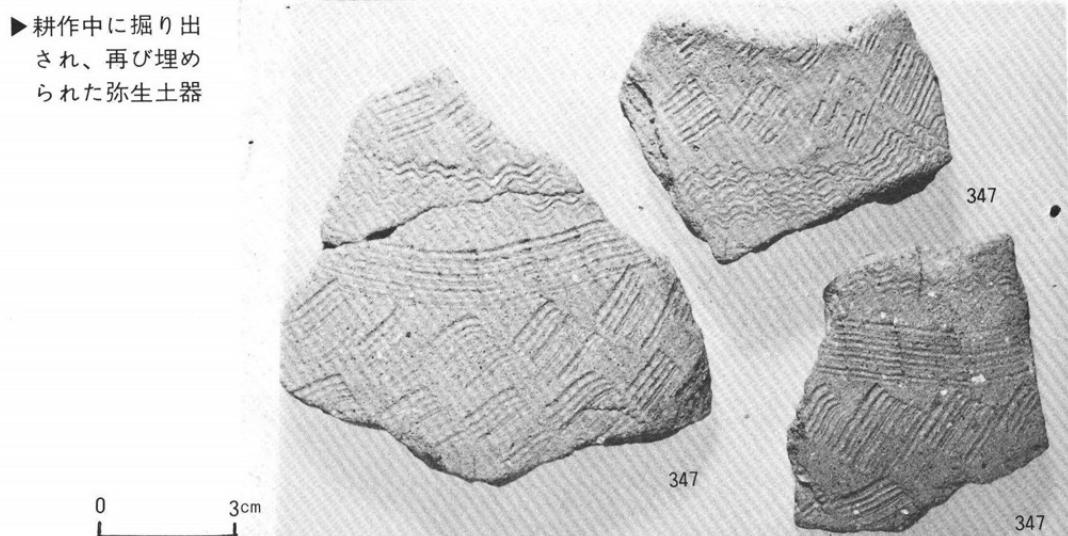
▲炭化物の付着した弥生土器の破片（第3号住居址）



▲さまざまの弥生土器



►第Ⅰ号方形周溝
墓出土の弥生土器



►土器の底部と巾
手土器の巾手部
分



▲ 発掘のあと破壊を待つばかりの遺跡



▲ 駒ヶ原南遺跡の発掘メンバー

駒ヶ原南遺跡

緊急発掘調査報告

昭和53年3月15日 印刷

昭和53年3月18日 発行

発行所 長野県上伊那郡宮田村
教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
株式会社印刷

